導かれし魔剣戦士

神鳥ガルーダ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アバンの使徒の長兄ヒュンケルは、異世界の神マスタードラゴンの依頼を受けた三神により、異世界に飛ばされた。

そこで彼は、お転婆姫の一行と出会う。

それは、新たに彼に課せられた導かれし者としての使命であった。

これは、ドラゴンクエストⅣとダイの大冒険とのクロスオーバー作品です。

注意：「クリアリ、ヒュンエイじゃないと嫌」という方は読まない事をお奨めします。

タイトルは、前ににじファンで「かのもの」というＨＮで投稿していた話と同じですが、内容は結構変更してあります。
ハーメルンからＴＩＮＡＭＩに移転し、ＴＩＮＡＭＩから暁～小説投稿サイト～へ移転し、更に暁を退会し、こちらに再投稿する事にしました。
この作品に限り、台本形式で執筆します。
それに関する否定的意見は一切、お応えしませんのであしからず。

目次

プロローグ
神々の思惑 ―― 1
癒えた体 ―― 9
第一章　お転婆姫の冒険
攫われた王女？ ―― 16
本物の姫君 ―― 27
圧倒的実力 ―― 37
ヒュンケル、現状を知る ―― 48
砂漠のバザーへ ―― 66
父 ―― 74
予知夢 ―― 85
王宮戦士との邂逅 ―― 93
謎の戦士デスピサロ ―― 104
武術大会 ―― 118
告白…別れ ―― 129
第二章　武器屋トルネコ
武器を求めて ―― 139
世界一の武器屋を目指す者 ―― 148
エンドールの武器事情 ―― 157

プロローグ
神々の思惑

勇者ダイが大魔王バーンを倒して約二年が過ぎた。
彼の消息は未だ掴めていない。
しかし、彼が生きているのは間違いない。
だから、彼が帰ってくるまでこの地上の平和を守る事を彼らは誓っていた。
そんな中、アバンの使徒の長兄であるヒュンケルは、竜の騎士親子（バランとダイ）に忠誠を誓う竜騎衆・陸戦騎ラーハルトと共に旅を続けていた。
そして、パプニカ三賢者のエイミも想い人（ヒュンケル）の後を追う様に付いて来ていた。
☆★☆
夜になり、ヒュンケルとラーハルトは夜営の準備を済ませ、焚き火の前に座り込んでいた。
ラーハルト
「やはり……ダイ様は見つからないな…」
ヒュンケル

「ただ歩き回っているだけでは見つからんだろうさ…」
ラーハルト
「やはり地上には居られないのだろうか?」
ヒュンケル
「生きているのは確実だが……ロン・ベルクの推測した通り、魔界かそれとも天界にいるのかも知れん…」
彼らの旅の目的の一つは、行方不明のダイの捜索であった。
彼ら以外の仲間達は、それぞれ大切な仕事がある。
ダイを想うパフニカ王女レオナは、即位して女王となり、パフニカ王国を治めなければならなかったし、ダイの一番の親友であるポップは、大魔導士としてパプニカ王国に仕え、女王となったレオナの相談役を務めており、マァムはメルルと共にそんなポップを支えていた。
無論、彼の師であるマトリフの様に側近たちに苛められることもない。
先のマトリフの件を知ったレオナが、そんな事を許さないからだ。
彼らの師であるアバンは故郷カール王国に戻り、フローラ女王と結婚し、カール王国の国王となっていた。
先代の勇者であり、当代の勇者の師匠としての名声とカリスマ性を持って、フローラ

と共にカール王国再建に尽力していた。
獣王クロコダイン、空手ねずみチウ、兵士(ポーン)ヒムや他の獣王遊撃隊の面々は、ダイの育った地であるデルムリン島に身を寄せており、時々、相互理解の為にデルムリン島には人間たちが訪れ交流を深めているらしい。
北の勇者と呼ばれるノヴァは、先の大戦で、両腕に深手を負った魔界最高の名工ロン・ベルクに弟子入りし、彼の代わりに彼の武器『星皇剣』を完成させる為に、鍛冶屋としての修行に従事している。
他の皆はこの様な事情があるので、ダイの捜索が可能なのはヒュンケルとラーハルトのみという事になっていた。
ヒュンケルは、かつてパプニカ王国を一度滅ぼした身の為、如何に改心したとはいえ、一部のパプニカの重臣や役人たちに警戒されている。
レオナやパプニカ三賢者であるアポロとマリン、そしてヒュンケルを愛するエイミやバダック等は、ヒュンケルを信頼しているが、すべてのパプニカの人間がヒュンケルを信頼しているわけではないのだ。
ラーハルトは、そもそも人間を憎んでおり、親同然のバランの遺言と忠誠を捧げるダイが人間を守っているのでそれに従っているに過ぎない。
ラーハルトにとって気を許せる人間は、互いの死を見取った戦友(とも)であるヒュンケルと

親友(ダイ)に対する献身に対し尊敬を抱かせたポップ――――この二人はラーハルトの過去の悲劇を我が事の様に涙した事に関しても感じ入っている――――達、アバンの使徒くらいである。

そこらに自生している果物や木の実などを採りに行っていたエイミも戻り、携帯していた干し肉などで夕食をとったヒュンケル達は、交代で睡眠をとろうとした時、異変が起こった。

エイミ

「ヒュンケル…あれを見て…!」

上空に三つの光の玉が発生していた。

ヒュンケル

「な…何だ、あの光は?」

ラーハルト

「それぞれの光の中に何か居るぞ!?」

中央の光の玉には竜の、左右の光の玉には人型のシルエットが浮かんでいた……いや、どうやら右側のシルエットは人間ではなく魔族の様だ。

ヒュンケル
「くっ……何という神々しさと威圧感だ…。ただの竜や魔族…ましてや人間に放てるモノではないぞ…!?」
ラーハルト
「ま……まさか…!?」
大魔王バーン亡き今、これ程の力を発する者と云えば、魔界に封印されている冥竜王ヴェルザーを除けば神々しかいない。
その時、三つの光の玉が凄まじい閃光を放ち、ラーハルトとエイミは余りのまぶしさに眼を覆った。
閃光が治まり、二人が眼を開けると……その場にいる筈のヒュンケルの姿が無かった。
エイミ
「ヒュンケル!?」
ラーハルト
「バ…バカな…ヒュンケルが…消えた……!?」
☆★☆
天界……三神の間。

ここは、この世界を司る神々……竜の神、魔族の神、人間の神が一同に会する場所である。

竜の神

「済まぬな人間の神よ……我が盟友の頼みを聞き届けてくれて…」

魔族の神

「しかし何故、あの者なのだ？」

人間の神

「正直、私は彼をこれ以上戦いに駆り出したくはなかった。彼は先の大魔王との戦いで傷付きすぎた……何故、マスタードラゴン殿は彼を指名したのだ？」

竜の神

「それは我にも解らん。しかし、マスタードラゴン殿が是非にもあの者を切望してな……彼の頼みは無碍には出来んよ」

人間の神

「確かに…あのヒュンケルと申す者は人間の中では最強の戦士……今となってはポップと申す者と共に竜の騎士（ダイ）に次ぐ実力者だ……マスタードラゴン殿の世界で彼に対抗できる者など……封じられている地獄の帝王（エスターク）くらいではないか？」

魔族の神

「それどころか、精霊ルビス殿の世界の大魔王ゾーマ、竜王、破壊神シドー以外相手になるまい……ラーハルトやヒムと申す者たちもだが……な」

竜の神

「…そんな彼らを圧倒し、我らの世界を脅かした大魔王バーンは、本当に規格外だな…」

同じ大魔王の称号を持つとはいえ、ゾーマなどバーンと比べると遥かに劣る。

それどころか竜王やシドー、エスタークもバーンには遠く及ばない。

魔族の神

「他の世界と違い、この世界は我ら三柱の神によって司られている為、他の世界よりも『神の力』は強力な筈なのだが……」

人間の神

「彼奴は、それすらも上回りおったからな……」

竜の神

「そして、当代の竜（ドラゴン）の騎士は、その大魔王（バーン）すらも上回った…」

魔族の神

「歴代の竜の騎士にはない魂の力を持って見事に…な」

本来、一代限りの竜の騎士に子供を作らせるという苦肉の策は、見事成功し、自分達を凌駕した大魔王を打倒する事に成功した。

人間の神
「話がそれたな…」
魔族の神
「うむ。あの者をマスタードラゴン殿の世界に送った事…果たして吉と出るか凶と出るか…」
竜の神
「もはや、我々神でも予想が付かぬ……な」
こうして、アバンの使徒の長兄ヒュンケルの新たなる物語が始まった。
神々の思惑により、ヒュンケルにどの様な運命が待ち受けると云うのであろうか？

癒えた体

ヒュンケル
「……こ…これは一体!?」
気が付けばヒュンケルは広い平原に立っていた。
ついさっきまで洞窟の前で夜営していたのに、空は明るく居る場所が変わっている。
あの光に包まれ、別の場所に転移させられた様だった。
ヒュンケル
「……それにしても…あれが『神々』なのか?何の目的で俺を……」
何故、世界を治める神々が自分の前に現れたのか?
そして、ここは何処なのか?
ヒュンケルが考えてようとした時、周囲から怪物(モンスター)の気配を感じた。
どうやら一匹ではなく、複数いる様だ。
ヒュンケル
「な…何だ、あの怪物は?」
現れた怪物は、牛と鳥を合わせた様な姿をしており、ヒュンケルが見たことがない種

族だった。

周知の通り、ヒュンケルは元・魔王軍六団長の一人、不死騎団長。

不死系（アンデッド）の怪物達を率いていたとはいえ、他の軍団を構成している怪物達も熟知している。

そして、親友のクロコダインが率いた百獣魔団は、動植物系の怪物の集まりだが、この様な怪物は存在していなかった。

ならば、魔界の怪物なのだろうか？

流石のヒュンケルも魔界の怪物全てを把握している訳ではない。

全知全能と云われる大魔王バーンですら、広大な魔界全ての怪物を把握していたか定かではないのだから…。

☆★☆

牛と鳥の怪物…『暴れ牛鳥』はヒュンケルの前に出るといきなり突進してきた。

この怪物の特徴は、牛の体躯を利用した体当たりで、まともに喰らえば強靭な戦士ですら致命傷を負うとされる。

ヒュンケルはその攻撃をジャンプして躱し、剣を抜いてその脳天に斬撃を打ち込んだ。

斬撃は、見事に暴れ牛鳥を真っ二つし両断した。

ヒュンケル
「…な…何ッ?!」
ヒュンケルは、自らの体のに調子に驚いた。
とても体が軽く、痛みもなかったからだ。
ヒュンケルは、先の大魔宮(バーンパレス)でのヒムとの死闘、そしてその後に奇襲してきたマキシマムの超金属軍団(オリハルコン)との戦いで回復不能の深刻なダメージを負っていた。
回復呪文(ベホマ)ですらも完治させるのが不可能だった筈のヒュンケルの体が完全に癒えていたのだ。
ヒュンケル
「……一体、どうなっているんだ…?」
自らに起こった奇妙な出来事……。
だが次の瞬間、ヒュンケルにある感情が湧き上がってきていた。
それは…『歓喜』。
ヒュンケル
「フフフ……ハァーハッハッハッ!」
ヒュンケルは、先の戦いで傷付いた事を後悔してはいない。
結果、二度と戦えない体になったが、最後の最後まで戦い、そしてヒムを救えた…。

この事自体に後悔はなかった。
ラーハルトの言うとおり、戦闘マシーンになりきれない自分は、ある意味戦士失格なのかも知れない。
それでも、やはり戦いの中で生きてきたヒュンケルにとって、戦闘力を喪った事で、物足りなさを感じていたのだ。
だが、今は違う。
理由は解らないが、今、自分の体は完治した。
多少のブランクは感じるが、そんなモノはいつでも取り戻せる。
何度も言うが、傷付いた事に後悔はない。
しかし、五体満足な体のありがたさは、この二年で痛いほど理解していた。
魔王の邪悪の意思が無くなった事により、怪物達は穏やかになったが、『魔のサソリ』の様に元々、凶悪な怪物も多く存在している。
そんな怪物と遭遇した時、ラーハルトの後ろで戦いを見ているだけの自分が情けなかった。
ヒュンケル
「……!?」
その時、ヒュンケルは気付いた。

目の前の怪物は、確かに見たことが無い種族の怪物だが……生来、凶暴な怪物なのだろうか？

中には戦闘中にも関らず、眠っている奴もいる。

ヒュンケルは、魔法が使えないので睡眠呪文（ラリホー）は使えないし、始めから眠っていた。

そんな怪物が、魔王の邪悪な意思無くして、人間を……しかも確実に自分達よりも強い相手に襲い掛かってくるのか？

答えは…否だ。

動物系のモンスターは獣である故に、魔王の邪悪な意思に操られでもしない限り、本能的に自分よりも強い者と敵対はしない。

中には『メタルスライム』や『はぐれメタル』など邪悪な意思に操られながらも、直ぐに逃げる怪物も存在するが……。

先ほどの突進だが、並の人間ならば致命的なダメージを受けるだろうが、ヒュンケルには通用しない。

ヒュンケルは、体は細身だがそれなりに力はある。

少なくともクロコダイン級以上のパワーでもない限り、力負けする事はない。

現に、ヒュンケルは竜騎将バラン配下の竜騎衆一の剛力を誇る海戦騎ボラホーンの渾身の一撃を、片手で受け止めている。

ボラホーンのパワーに比べれば、種族の中で最弱の暴れ牛鳥程度の突進など、児戯にも等しい。

つまり、それ程の力量差があるのに、目の前の暴れ牛鳥は逃げようともせず、眠っている者を除き全員、ヒュンケルに向かって来て、叩っ斬られていた。

ヒュンケル

「……今、考えても仕方が無いか……。今はとにかくラーハルト達と合流しなければならないが……ここは何処なのだろう?」

ヒュンケルは、未だ自分が異世界に送られた事に気付いていなかった。

☆★☆

天空人A

「御体は大丈夫でしょうか?マスタードラゴン様」

マスタードラゴン

「うむ。問題はない…少し疲れたがな」

天空人B

「今の弱まった御力で、再起不能なダメージを完全に癒す等……御体にさわりますぞ!」

マスタードラゴン

「何…このくらいは大丈夫だ。それにあの者の体を癒さねば、三神に頭を下げてまで借

り受けた意味があるまい…」
　天空人Ａ
「しかし何故、あの男なのですかな？」
　天空人Ｂ
「ポップとかいう魔法使いの少年でもよかったのでは？」
　マスタードラゴン
「確かに……あの戦いで最も成長したのはポップと申す少年だが、私が『導かれし者』に相応しいと思うのは、彼よりもヒュンケルの方なのだ」
　天空人Ａ・Ｂ
「「……!?」」
　マスタードラゴン
「……何れは解ろう。『魔法使い』では無く『戦士』を選んだ理由がな……」

第一章　お転婆姫の冒険
攫われた王女？

ヒュンケル
「……そろそろ昼時か…」
先の暴れ牛鳥との戦いから数時間後…それ以降も様々な怪物モンスターに襲われるも、苦も無く一蹴していた。
ヒュンケル
「どこかで昼飯でも調達……ムッ…あれは町か？」
都合の良い事に近くに町を発見した。
ヒュンケル
「今日は、あの町で一泊するか…、ここがどの辺りなのか調べる必要もあるからな…」
情報がない為、未だ異世界に居る事に気付いていないヒュンケルは、食事と情報収集の為に、その町に足を向けた。

町に入ると、まるで祭りの様に騒いでいた。
ヒュンケル
「失礼ですが…この騒ぎは何ですか?」
村人A
「ああ。実はこのフレノールにサントハイムのお姫様がお泊りになられているんですよ」
村人B
「お姫様は、二人の御供を連れて今、宿屋の二階に御滞在中ですよ」
村人C
「宿屋の主人は大層、お姫様をもてなしておるそうじゃ…ワシも蓄えを差し出そうかのう」
成る程、この騒ぎはそういう理由か…と、ヒュンケルは思った。
確かに、地方の町に一国の姫君が滞在となると騒ぎになって当然だ。
ヒュンケル
(それにしても…サントハイムの姫君?サントハイムという国など聞いたこともないが…?)
今、現在ある諸国といえば、カール、テラン、ベンガーナ、リンガイア、ロモス、パ

プニカの六カ国であり、オーザム、アルキードは滅びている。
新たな国が興ったなどという話も聞いていない。
訝しむがとにかく宿を取るためにも宿屋に向かう事にした。
★☆★
老人
「泊まれないというのはどういうことですかな?」
宿屋の主人
「ですから、本日はサントハイムのお姫様の貸切となっておりますので、一般の方はお断りさせて頂いております」
神官
「私達はともかく、ひめさ……連れの女性だけでも泊めさせていただきたいのですが…」
宿屋の主人
「…駄目です。御滞在の姫様に何か粗相があっては困りますので……」
ヒュンケルが宿屋に入ると、宿屋の主人と旅人が口論していた。
旅人は三人連れで、押しの弱そうな見習い神官と見るからに頑固そうな老人、最後の一人は美しい少女だが、おしとやかというよりは勇ましい感じがしている。よく言えば明朗快活、悪く言えばお転婆…そんな感じだ。

話を聞いていると、どうやらサントハイムとやらの姫君が宿を貸切にしている為、宿泊が出来ない様だ。

少女

「…困ったわね…貴方もこちらで宿を取るつもりだったの?」

後ろで口論を眺めていた少女が、傍にいたヒュンケルに話しかけてきた。

ヒュンケル

「…まあな。宿泊出来ないのは構わんが、食事くらいはさせてもらいたいが…」

少女

「あの様子じゃ…無理なんじゃないかしら…」

ヒュンケル

「…その様だな…」

などと話していると神官と老人が話を切り上げ、少女の下に戻ってきた。

老人

「……まったく話になりませんな…」

神官

「……申し訳ありません。この宿では泊まる事は出来そうにありませんので、この町の教会で宿を借りようと思います」

ここの教会はかなり小さいが、夜露をしのぐ程度なら何とかなる。
少女
「それしかないわね…」
老人
「ところで、その者は?」
老人は、訝しむ様にヒュンケルに視線を向けた。
少女
「この人も、宿を取りに来たみたいよ」
神官
「…お互い残念ですね…」
ヒュンケル
「…まあ、一国の姫君が滞在するとなれば止むを得まい……何処かで食料を調達してくるしかないな…」
ヒュンケルが、三人に会釈して出口に向かおうとしたその時…二階から大きな音が響いた。
少女
「何事かしら?!」

???

「イヤ――ッ離して! 誰か、助けて――――!!』

女性の甲高い悲鳴が聞こえた瞬間、ヒュンケルと少女は二階に駆け出して行った。

★☆★

二階に駆け付けたヒュンケルと少女が見たのは、謎の三人組に拘束される姫君と、倒れ伏す二人の従者。

従者A

「…や…やられた」

従者B

「姫が人攫いに……誰か…メ…姫をお救い下され…」

少女が拘束された姫を助けようと駆け出すと、三人組が待ったを掛けた。

覆面男

「止まれ! それ以上近付くと、姫の命はないぞ……しかし、まさかこんな宿屋にお姫様が来ているとはな! では、先生方行きましょう」

覆面の男は左右に居る黒ずくめの男たちを促すと裏の非常階段から姫を連れて逃走した。

少女

「待ちなさい！」

賊たちを追う為、ヒュンケルと少女も非常階段を駆け下りると、黒ずくめの男たちが待ち構えていた。

覆面男

「先生方…よろしくお願いしやす！ほら、姫はこっちに来るんだ！」

姫

「イヤ…離して…許して…」

ヒュンケル

「逃がすか！」

黒ずくめＡ

「キィーヒッヒッヒッ…残念だがここから先は通さぬ…火炎呪文（メラミ）！」

覆面の男を追おうとしたヒュンケルに黒ずくめの男が『火炎呪文（メラミ）』を撃って来た。

それに対しヒュンケルは、鋼の剣を抜刀し『火炎呪文（メラミ）』を斬った。

黒ずくめＡ

「なんと！魔法を剣で斬るとは…!?人間風情が中々やるな…キィーヒッヒッヒッ！」

ヒュンケル

「チッ…その不愉快な笑いを止めろ！」

黒ずくめの男の笑いは、ヒュンケルが心底軽蔑するとある男の笑い方そっくりであった。

少女の方にも黒ずくめの男が立ちはだかっていた。
ヒュンケルの方の黒ずくめの男は魔法使い型だが、この男はどうなら戦士型の様である。

少女
「どきなさい！」
少女は黒ずくめの男に飛び蹴りを放つが、男の手の平から黒い霧の様な物に覆われるとそこから糸の様な物が現れ、少女を拘束した。
黒ずくめの男B
「闘魔傀儡掌！」
少女
「な…何これ…」
黒ずくめの男B
「クククッ…これで貴様は俺の操り人形だ…」

黒ずくめの男が指を動かす度に、少女の間接が捻り上げられる。
少女
「…クゥ…!」
激痛が走るが、少女は呻き声を発するだけ悲鳴を上げず耐えていた。
黒ずくめの男B
「フッ…なかなか根性がある様だが…いつまで耐えられるかな…?」

ヒュンケル
「何っ…あれは…闘魔傀儡掌!?」
黒ずくめの男A
「ほう……暗黒闘気を知っておるとは…お主、只者ではないのぅ…キィーヒッヒッヒ!」
闘気とは、攻撃的生命エネルギーの事であり、剣や呪文に並ぶ闘法の一つである。
正義の戦士が使う『光の闘気』と対極に位置するのが心を悪に染めた者や邪悪なる生命体が用いる『暗黒闘気』である。
『闘魔傀儡掌』とは、その『暗黒闘気』を糸の様に使い、相手を体を操り人形の様に操る技である。

黒ずくめの男Ａ
「キィーヒッヒッヒッ…あの小娘…五体満足で済むかな…」
ヒュンケルは、少女を救おうと黒ずくめの男Ｂに直接攻撃しようとするが、それを黒ずくめの男Ａが立ちはだかり遮った。
黒ずくめの男Ａ
「おっと…そうはいかんぞ……閃熱呪文(ベギラマ)!」
発せられた『閃熱呪文(ベギラマ)』を躱すと鋼の剣を鞘に納刀する。
黒ずくめの男は諦めたのかと訝しむと、ヒュンケルはその場で再び抜刀する。
ヒュンケル
「アバン流刀殺法、空裂斬!」
抜刀された鋼の剣の刀身から『光の闘気』の斬撃が放たれ、少女を拘束していた暗黒闘気の糸が切断された。
黒ずくめの男Ｂ
「…馬鹿な……俺の暗黒闘気を!?な…何者なのだ貴様は!」
余程自信があったのか、自分の技をあっさりと破られた黒ずくめの男は、呆然とヒュンケルに視線を向けた。
黒ずくめの男Ａ

「…どうやら旗色が悪いようじゃのぅ…あの人間(おとこ)も無事に姫を連れ去れた事じゃし…我らも退くとするかの…」

黒ずくめの男達の姿がフッと消えた。

ヒュンケル

「…合流呪文(リリルーラ)か…どうやらあの黒ずくめ達は、普通の人間では無い様だな…」

流石のヒュンケルも『瞬間移動呪文(ルーラ)』系の呪文を使われれば追い着くことは不可能なので、『闘魔傀儡掌』を受け倒れた少女を抱き、宿屋に戻る事にした。

本物の姫君

宿屋に泊まっていたサントハイムのお姫様が攫われた。
その情報は、直ぐに村中に広がった。
村中が騒然となる中、ヒュンケルは道具屋で薬草を購入していた。
村の子供
「お兄ちゃん」
そんなヒュンケルに、犬を連れた子供が話し掛けてきた。
ヒュンケル
「……なんだ?」
村の子供
「さっき犬のコロがこんな手紙を銜えてきたんだ…どうもお姫様のことらしいからお兄ちゃんにあげるね」
子供はヒュンケルに手紙を渡すと、飼い犬と共に駆け出してて行った。
手紙にはこう書かれている。
『姫を返してほしくば、明日の夜、この村の宝　黄金の腕輪　を町の墓場まで、持って

来い』

ヒュンケル

「…やはり身代金目的の誘拐か…」

宿に戻り、先ほど暗黒闘気によって傷付いた少女が休んでいる部屋に入ると、少女に神官が『回復呪文(ホイミ)』を必死になって唱えていた。

神官

「何故…何故…回復呪文(ホイミ)が効かないんだ!?」

老人

「奇怪な…これは一体…???」

神官がいくら回復呪文を唱えても、少女の傷は消えず、体力も回復しなかった。

ヒュンケル

「…薬草を買ってきたから、これを使え…」

ヒュンケルは少女に薬草を渡すと、半泣きになっている神官を宥めた。

神官

「私の回復呪文が効かないなんて…私の神に対する信心が足らないのでしょうか？」
　ヒュンケル
「別にお前が未熟だという理由ではない。この娘が受けた傷は回復呪文を受け付けないだけだ」
　老人
「なんと!?それはどういう事ですかな？」
　ヒュンケル
「この娘は、暗黒闘気によって傷つけられた。暗黒闘気で受けた傷は回復呪文では治らん。薬草などで時間を掛けて治すしか方法がないのだ」
　神官・老人
「「…暗黒闘気!?」」
『暗黒闘気』の説明を受けると神官と老人は憂いた表情で少女に視線を向けた。
　ヒュンケル
「ところで、犯人側から要求があったぞ」
　少女
「犯人はどんな要求をしてきたの？」
ベットで横になっていた少女が体を起こし、ヒュンケルに詰め寄ろうとした。

神官
「無理をしてはいけません…！」
ヒュンケル
「こいつの言う通りだ、お前は安静にしていろ！明日の夜までにこの村の宝である黄金の腕輪とやらを要求してきた…」
老人
「…黄金の腕輪じゃと…!?」
『黄金の腕輪』とは、フレノールの村に伝わる腕輪で、災いを齎すと云われ、フレノールから南に位置する洞窟に封印された曰く付きの代物である。
噂では暗黒の力を宿していると云われている。
ヒュンケル
「……解せんな…？」
少女
「…何が？」
ヒュンケル
「あの覆面男は兎も角、黒ずくめの男たちならば、わざわざ姫を攫わなくとも手に入れられる筈……何故、誘拐などというまどろっこしい事をする必要があるのだ？」

対峙して分かったが、あの黒ずくめの男たちの実力は、魔王時代のハドラーと遜色ない実力を持っている。
それに奴等の口ぶりからして、人間では無い様だし……。
村に保管されていようと、洞窟に封印されていようと、あの２人ならば、力ずくで奪える筈…。
ヒュンケル
「その黄金の腕輪とやらは、特別な方法でないと手に入れられない物なのか？」
老人
「いや…ただ南の洞窟の奥深くの宝箱に入っておるだけに過ぎん…ただ、その洞窟はそれなりに強力な怪物モンスターが徘徊しておるが……」
ヒュンケル
（奴等ですら、手こずるほどの怪物が棲息しているのか？）
とりあえず、村の宝だろうが何だろうが、姫の命には代えられないので、ヒュンケルは南の洞窟に向かう事にした……のだが、何と少女が同行すると言い出した。
神官と老人も少女を止めようとするが、少女は聞き分けない。
ヒュンケル
「その体で何が出来る…俺に任せて養生した方が良い」

少女の傷は決して軽くは無い。
『闘魔傀儡掌』によって受けたダメージは、命に別状は無いもののそれなりに深い。
少女
「でも、私はどうしてもあの娘を助けなければならないの！」
ヒュンケル
「……別にお前の力は必要ない…俺だけで充分だ」
少女
「でも、あの娘は私の身代わりに攫われた様なものだし……私が助けるのが義務なの！」
老人
「な…なりませんぞ！それ以上、話しては…!!」
突然の少女の告白に、老人が焦り割って入ろうとしたが、それをヒュンケルが遮った。
ヒュンケル
「…身代わり…だと!?ま…まさか…」
少女
「……私の名前はアリーナ。サントハイムの王女よ！」
★☆★
ヒュンケル

「……なるほど…つまり、攫われたのは偽者だった・・・という訳か」
目の前のサントハイムの王女を名乗る少女……アリーナは確かに何処か気品の様な物を持ち合わせている。
そして、神官の名はクリフト、老人の名はブライと言い、アリーナの従者との事だ。
ヒュンケル
「道理で妙だと思ったが…偽者ならば納得だ…」
アリーナ
「…妙って!?」
一国の姫君ともあろう者が旅をするのに護衛が2人などあり得ない。
最低でも一個分隊くらいで護衛する筈である。
少人数の護衛ならお忍びの旅となり、安全を考えればそもそも正体を明かさない。
レオナ女王も、かつてダイとポップを伴いベンガーナに買い物に行った時、自分がパプニカの姫である事を明かさなかった。
正体を明かしていれば、『ドラゴンキラー』のオークションの時、あんなにも見縊られなかっただろう。
ダイとポップは護衛としても申し分ないし……当時のポップは少し心もとないかもしれないが……。

村全体に広がる様に正体を明かし、護衛が――碌に戦えない――たった2人等、余りにも不自然過ぎるのだ。

クリフト

「言われてみれば確かに……我らも正体を隠していましたしね…」

ブライ

「一国の姫がお忍びで旅をするのじゃ、それくらいの配慮はせねばな」

ヒュンケル

「話を戻しましょう……姫君…」

アリーナは断固、自分が『黄金の腕輪』を取りに行くと主張する。

ブライ

「…姫様が責任を感じる必要はないでしょう。責任は『騙り』を働いたあの娘達をあります」

クリフト

「確かに、あの人を見捨てるわけにはいきませんが、傷付いた姫様が無理をしてまで

……」

アリーナ

「でも、私が城を出た事が原因でしょう？城を出た事は後悔してないし、帰るつもりはないけど……私が助けるのが筋だわ！」

ヒュンケル

「……言っても聞かないようだな。問答をしている時間も惜しい…やむをえません…着いてくるのは構いませんが、決して無理はしない事…その御供の御二方から離れない事…勝手な行動を取らない事…この事を守って頂けますか？」

アリーナが了承したので、仕方無しに連れていく事にした。

自分が発端となった事件を、人任せにしたくない様だ。

正直、いくらアリーナが城を出た事が遠因とはいえ、姫君の名を騙って詐欺を働いた事に変わりはないので、情状酌量の余地もないのだが…。

まあ、偽者と解っても助けないという選択は、ヒュンケルにもなかった。

彼女が根っからの悪党ならば見捨てても良かったが、どうやらちょっと魔が差しただけのようだし、今回の件で充分報いを受けただろう…。

ブライ

「あの偽者が悪党ではないとは、どういう事ですかな？」

ヒュンケル
「この村に住むの老人が、偽姫に自分の蓄えを貢ごうとしたのだが、彼女達に断られたらしい…」
クリフト
「成る程、姫様の名を騙っていても、金品を巻き上げるような真似はしていないというわけですね」
ブライ
「ふむ。大方、姫様の名を騙ったら皆がチヤホヤしてくれたので調子に乗った…と、いうことですな…」
アリーナ
「じゃあ、もう反省はしているだろうから、助けてあげましょう」
こうして、ヒュンケルとアリーナ一行は、フレノールの村長の許可を取り、『黄金の腕輪』を手に入れる為に南の洞窟へ向かうのだった。

圧倒的実力

フレノール南の洞窟。
うっそうとした森の中にその口を開ける小さな洞窟で、争いの元となる『黄金の腕輪』が封印されている。
その洞窟に足を踏み入れたヒュンケルとアリーナ一行は、攫われた偽姫を救う為にその『黄金の腕輪』を求めて奥深くへと入っていった。
歩を進める度に目に付く人骨。
ヒュンケル
「……恐らく封印された宝を求めてこの洞窟に入り、怪物（モンスター）の餌食となった者たちの成れの果てだろう…」
ブライ
「我らも、彼奴らの二の舞にならない様に注意せねば……」
クリフト
「御体は大丈夫ですか……姫様？」
アリーナ

「ええ。普通に歩くくらいなら問題はないわ…」
『暗黒闘気』によって傷付いた体を気遣うクリフトに、アリーナは笑顔で応えた。
ヒュンケル
「クリフトとブライ殿はとりあえず背後から来る敵のみに気をつけてくれ」
クリフト
「背後からのみ…ですか?」
ヒュンケル
「ああ。まったく警戒しなくていいとは言わないが……正面からの敵は余り気にしなくていい」
等と話していると進行先から複数の蝙蝠の群れが襲い掛かってきた。
この洞窟に棲息する怪物の一種『吸血蝙蝠』である。
アリーナたちが身構え応戦しようとしたとき、ヒュンケルが鋼の剣を抜刀……。
その時に発生した剣圧によって、吸血蝙蝠達は真っ二つになっていた。
「行くぞ!」
唖然としたアリーナ達を一瞥するとヒュンケルは歩を進め、アリーナ達は慌てて後を追った。

アリーナ
「す……凄い…」
クリフト
「な……なんという人なんでしょう…」
ブライ
「ま……まさかこれほどとは…」
洞窟の奥に進む度にアリーナ達はヒュンケルの実力に圧倒された。
この洞窟に棲息する怪物である『ベビーマジシャン』、『お化け茸』、『暴れ牛鳥』、『メラゴースト』、『テベロ』、『ラリホービートル』、『鬼小僧』、『鶏冠蛇』、『吸血蝙蝠』が次々と襲い掛かってくるが、まったく苦も無く屠っていた。
時々、ヒュンケルが正面からの敵に対処している間に、背後から襲い掛かってくる敵もいたが、アリーナ――無理をするな……と言われたが結局、参加している――達が応戦している間に、正面の敵を片付け、すぐさま背後の敵に対応してしまうのだ。
ブライ
「公務で他の国を訪れた際、その国の軍事教練などを拝見させてもらった事もあります

が……あれほどの手垂れにはお目にかかったことがない…強力な王宮戦士を擁するバトランドにもあれほどの戦士がいるかどうか……」

アリーナ

「……」

アリーナはブライの言葉を聞きながらヒュンケルに魅入っていた。

そして、世界の広さを実感した。

城で兵士たち相手に組み手などを行っていたが、自分の国の兵士にはあれほどの手垂れはいない…。

誰もアリーナに勝てる者はいなかった。

最初は、姫である自分に対し本気になれないからだと思っていたが、実際は下手に手加減すると自分の身が大怪我をしていまうので兵士達は割と本気でアリーナの相手をしていたのだ。

だからこそ武者修行の旅に出たのだが……。

アリーナ

「あのヒュンケルに出会えた事だけでも、武者修行の旅に出て良かったわ」

今の自分ではどう足掻いてもヒュンケルには勝てない。

正直、ヒュンケルの動きを追うのでやっとだ。

にも拘らず、ヒュンケルの方はまだまだ余力を残している様子だ。
つまりアリーナが追えない程の実力を見せながら、ヒュンケルは実力の全てを見せていないという事になる。
だが、アリーナが気になっているのはヒュンケルの強さだけではない。
ヒュンケルの澄んだ瞳に映る哀しげで淋しそうな色……。
きっと彼は何か重い物を背負っているのではないか……。
この時から、アリーナにとってヒュンケルは気になる存在となった……。
☆★☆
洞窟Ｂ２Ｆの奥。紋章が彫られた床の上に置かれた宝箱の中に、『黄金の腕輪』が眠っていた。
クリフト
「これが、黄金の腕輪…」
ブライ
「苦労して手に入れた物が悪党共の手に渡ると考えると腹立たしいですな……」
アリーナ
「……そう？ヒュンケルのお陰で結構楽だったじゃない…」
ヒュンケル

（…やはり解せないな……この洞窟に巣食う怪物達は外の奴等よりは強いのも居たが……それでもあの２人からすれば苦にもならん筈……洞窟に充満する聖なる力も『破邪呪文（マホカトール）』には遠く及ばない…。なのに何故…奴等は自分達で取りに来なかった？）

宝箱から『黄金の腕輪』を取り出し、常備している『ふくろ』にしまっているアリーナ達を見ながら、ヒュンケルは考えていた。

アリーナ

「…どうしたのヒュンケル？」

ヒュンケル

「いえ、何でもありません。それでは戻るとしましょう」

アリーナ

「ねぇ……私と話す時はいちいち丁寧じゃなくてもいいよ…」

ヒュンケル

「ですが…」

アリーナ

「ううん。むしろ普通に話してほしいの……」

アリーナが上目遣いでヒュンケルを見る。

ヒュンケル

「…わかった。これでいいか姫」
アリーナ
「…『姫』じゃなくて、呼び捨てでいいよ」
ヒュンケル
「……アリーナ…」
アリーナ
「…うん」
クリフト
「……姫様!?」
ブライ
「……いけません！」
アリーナの発言に慌てて静止をかける従者２人。
アリーナ
「さあ、早くフレノールに戻りましょうヒュンケル！」
アリーナは２人を無視してヒュンケルの手を取って、来た道を戻り始めた。
『暗黒闘気』による傷はまだ癒えていないのに、なかなかタフな姫君であった。
クリフト

「姫様～～～～～～～!!」

ブライ

「まったく……御自分の身分を御考え下され……」

☆★☆

約束の時刻となり、ヒュンケルとアリーナ達は村の墓地に来ていた。

覆面男

「どうやら約束のブツは持ってきた様だな。早くこっちへよこしな!」

例の黒ずくめの男たちを引き連れた覆面男に『黄金の腕輪』を手渡そうとヒュンケルが近付くと、覆面男がそれを止めた。

覆面男

「待ちな!それ以上近付かずこっちに投げてよこせ!もし妙な真似をすると姫様の命はないぜ!」

覆面男だけなら、ヒュンケルだけで対処できるが黒ずくめの男達はそうはいかない。先日の戦闘を見る限り、実力的にはヒュンケルの方が上なのだが、それでも簡単に無力化できる相手ではない。

黒ずくめの男たちと戦っている間に、偽姫に危害を加えてくるだろう。

ヒュンケルはやむを得ず、『黄金の腕輪』を覆面男の方に投げ渡した。

覆面男
「確かに受け取ったぜ……じゃあ、姫様は返してやるよ、では先生方……行きましょう」
覆面男は、偽姫をヒュンケルの方に押し出すと黒ずくめの男たちを促して逃げようとした……が…。
黒ずくめの男Ａ
「……キィーヒッヒッヒッヒ！もはや貴様には用はないわ……死ね…火炎呪文（メラゾーマ）!!」
覆面男
「なっ…て…てめぇ…ぐぎゃああ――――っ!!」
黒ずくめの男が放った『火炎呪文（メラゾーマ）』によって、覆面男は焼き殺されてしまった。
偽姫
「ヒッ……ヒィィィ――――!!」
人が焼け死ぬ光景を目の当たりにし、偽姫はその場で失神した。
アリーナ
「あなた……どういうつもり!!」
クリフト
「なんと……むごい事を…」
ブライ

「…仲間を裏切り、焼き殺すとは……外道めが…」
黒ずくめの男の行動を見て、不快感を示すアリーナ達。
黒ずくめの男A
「キィーヒッヒッヒッ…仲間じゃと…我等が人間如きを仲間にするはずがあるまい…」
そう言うと、黒ずくめの男達は被っていたフードを脱いだ。
その容貌は確かに人間に近いが、人間ではなかった。
そして、ヒュンケルからすれば……片方の男は見慣れた男だった。
ヒュンケル達『アバンの使徒』が戦った相手の中で、最も卑怯で卑劣で、尊敬とは対極の感情を抱かせた男。
ヒュンケル
「貴様…生きていたのか！妖魔司教ザボエラ!!」
???
「…ザボエラじゃと……あんな奴と一緒にするな!!」
ヒュンケル
「何ッ！」
???
「儂の名はデボエラ……妖魔主教デボエラじゃ！」

ヒュンケル
「……妖魔主教デボエラだと!?」
ザボエラと瓜二つといって良い容姿の男…デボエラが嫌悪の表情で言い返してきた。
???
「まあ、似ているのも無理はない。こやつとザボエラは従兄弟同士だからな…」
ヒュンケル
「ザボエラの従兄弟だと!」
デボエラ
「……それにしてもザボエラを知っておるとは……なるほど…どうやら貴様は我らと同様、この世界の住人ではないようじゃな…」
ヒュンケル
「どういうことだ!?」
デボエラ
「この世界は、我らの居た世界と別の世界……すなわち異世界だということじゃ!」
デボエラの返答に、ヒュンケルは目を見開いた。

ヒュンケル、現状を知る

妖魔主教デボエラの台詞に、ヒュンケルは目を見開いた。

ヒュンケル

「別の世界……だと……!?」

デボエラ

「キィーヒッヒッヒ……気付いておらんかったようじゃが、考えてみればわかるじゃろう？我々の世界にサントハイムなどという王国が存在しておらんのじゃからな」

デボエラの指摘に、ヒュンケルは息を詰まらせる。

確かに、ヒュンケルの世界にあるのは、パプニカ、カール、ロモス、ベンガーナ、テラン、リンガイア……そしてオーザムとアルキード。

滅びた国を合わせてもこの８カ国しかない。

どうやらヒュンケルも認めたようだ。

そして、傷付いた自分の体を癒し、この世界に送り込んだのが誰なのか……ということも…。

最も送り込んだ者と体を癒した者は別なのだが…。

ヒュンケル
（神々は何故……俺を異世界に送り込んだんだ？）
一方、アリーナ達はデボエラの話に呆然となっていた。
アリーナ
「べ……別の世界？そんなのが本当にあるんだ」
ブライ
「確かに古い文献にその様な事が書いてあるのを読んだことはありますが……まさか本当に…」
クリフト
「おお神よ…」
アリーナは別の世界がある事に目を輝かせ、ブライは知識としては知っていたがそれが真実だった事に瞠目し、クリフトは混乱して神に祈っていた。
???
「デボエラ……どうやらこいつは、つい最近この世界に来たようだな」
デボエラ
「そのようじゃなギャック…」
もう一人の黒ずくめの男の名はギャックと言うらしい。

ヒュンケル
「では、貴様らがこの世界に来たのは？」
ギャック
「いまから17年くらい前になる」
ヒュンケル
「17年前……地上が魔王ハドラーに侵攻されていた時期か……」
2年前の大魔王バーンとの戦いより15年前……つまり今から17年前、ヒュンケルたちの世界はハドラーという魔王に侵攻を受けていた。
デボエラ
「……ハドラーか……確かに奴は強い。魔王を名乗るに相応しい実力の持ち主じゃったが……我らの居た魔界の大陸の支配者から見れば小物に過ぎんわ」
ギャック
「あの御方が原因で我らはこの世界に跳ばされただからな……」
ヒュンケル
「ハドラー以上というと……大魔王バーンか？」
ギャック
「ほう、人間風情があの魔界の神と呼ばれた大魔王バーンを知っていたか？」

この男達はバーンが魔王軍を率い地上侵攻する前に、この世界に跳ばされたのでいまやバーンの名が地上でも知れ渡っている事実を知らないようだ。

デボエラ

「確かに大魔王バーンも恐ろしい男じゃが……我らの大陸の支配者は冥竜王ヴェルザー殿じゃ」

冥竜王ヴェルザー。

かつて地上に君臨した三つの種族、人間、魔族……そして竜。

いまでこそドラゴンは怪物モンスターの一種とされているが、昔は人間以上の知恵を持っており、言葉を操る者も多かった。

そして、現存する最後の知恵ある竜こそが、『冥竜王ヴェルザー』なのだ。

ギャック

「17年前……ヴェルザー殿はある強敵と戦っておられた……」

ヒュンケル

「……バランの事だな」

デボエラ

「バーンの事だけでなく、あの『竜（ドラゴン）の騎士』バランのことまで知っておるとは、人間にしては博識じゃの……」

デボエラはザボエラと違い、ヴェルザーの配下だった為、バランが竜の騎士であるという事を知っていた。

ギャック

「…興味があるな。貴様、名前は何という……」

ヒュンケル

「……ヒュンケルだ…」

本来、名乗る筋合いなどなかったが、自分の今の状況を教えてくれたので素直に名乗った。

デボエラ

「ヒュンケル……とはな」

ギャック

「かつて魔界を牛耳った伝説の剣豪の名前を人間が名乗るとは……身の程知らずと言いたいが、その名に相応しい実力を持っているのは分かる」

デボエラ

「……ザボエラの奴の事を何故知っておる?」

ヒュンケル

「奴は、2年前地上に侵攻してきた魔王軍の軍団長だった」

ヒュンケルは簡潔に答えた。
流石に自分もその魔王軍の軍団長で、ザボエラの元同僚であった事は口にしなかった。
何しろ、魔王軍にいた頃からヒュンケルはザボエラをダニとして忌み嫌っていたからだ。
デボエラ
「ふむ。それで奴はどうなった……？」
ヒュンケル
「……死んだよ」
ヒュンケルの返答にデボエラは可笑しそうに哂った。
クリフト
「自分の従兄弟が死んだと聴かされて、何故哂っている!?」
神に仕えるこの真面目な青年から見て、血縁者が死んだ事を悲しまない目の前の男に怒りの表情を見せた。
デボエラ
「フン。あの情けない男とは縁を切っておる。ワシと同格の妖魔力を持ちながら、強者に媚び諂い、他者を道具として利用し、栄達しようとする様な屑など死んで当然じゃ

……」

デボエラの言葉にギャックも軽蔑しきった顔をしていた。

デボエラ

「彼奴の死因も、どうせ他人に取り入ろうとしてそれが通用せず、切り捨てられゴミの如くくたばったのじゃろう。自らを高めようとせず口先だけで栄達しようとする者の末路はそんなものじゃ…」

実に的をいた推理にヒュンケルは目の前の男を見据えた。

ザボエラの血縁とはいえ、ザボエラとは違う価値観を持っている様だ。

最も人間に対しては、ザボエラと同じく見下しているようだが……。

まあ、これは殆どの魔族と同じだろう。

人間と友誼を結んでいるロン・ベルクと人間の女を妻にしたラーハルトの父が珍しいのだろうから……。

☆★☆

ギャック

「話がそれたな……何故、我らがこの世界に来てしまったのかというと……」

ヒュンケルの師である勇者アバンが魔王ハドラーと戦っていたのと同じ時期に、竜の騎士バランは冥竜王ヴェルザーと戦っていた。

デボエラの言うとおりヴェルザーに比べれば、超魔生物ではない当時のハドラーなどは小物に過ぎない。

バランとヴェルザーの戦いは激しく、ヴェルザーは戦いに勝利する為に禁断の兵器を使用した。

『黒の結晶（コア）』。

魔界に伝わる忌まわしき伝説の超爆弾によって、ヴェルザーの支配していた大陸は消滅してしまった。

デボエラもギャックも当時はヴェルザーの配下であり、その大陸に滞在していた。

『黒の結晶』の凄まじい爆発に消し飛ばされようとしたその瞬間とき、時空が歪み、デボエラとギャックはその歪みに飲み込まれてしまった。

デボエラ

「これはワシの推測じゃが、黒の結晶の凄まじい爆発力は次元そのものを歪ませてしまったのじゃろう……それに飲み込まれたワシ等は、気が付けばこの世界にいた……というわけじゃ…」

ギャック

「最初はこの世界の魔族たちに溶け込もうと思っていたが……どうもこの世界の魔族たちとは馬が合わなかったのでな……人間達の裏社会に潜んでいたのだよ」

ヒュンケル
「成る程……それで今はそこの男に雇われていた……という訳か…」
ヒュンケルは先ほどデボエラの『火炎呪文(メラゾーマ)』に焼き殺された男に視線を向けた。
ギャック
「ああ。お前たちも知っての通りの屑だが……金払いだけは良かったからな……美味い酒には不自由しなかったな」
アリーナ
「じゃあ、何故裏切ったの?」
いかに悪人だったとはいえ、仲間に裏切られボロ屑の様に捨てられた男を憐れみ、アリーナが詰問した。
デボエラ
「キィーヒッヒッヒッ……それは黄金(こ)の腕輪(れ)を見たからよ」
デボエラは、『黄金の腕輪』を掲げた。
デボエラ
「この腕輪には素晴らしいほどの暗黒の力が宿っておる……これをワシにとって最高の研究材料になる。旨く行けばワシ等は絶大な力を得て、この世界の魔族共を屈服させることが出来よう……」

ギャック
「この世界の魔族を統べる者は、ヴェルザー殿や大魔王バーンには遠く及ばないが、それでも我らよりは強いからな……奴を凌駕する為に我らが利用させてもらう」
ヒュンケル
「そんな事させるか！」
ヒュンケルが『黄金の腕輪』を取り戻そうとデボエラたちに斬りかかるが、既にデボエラは『瞬間移動呪文（ルーラ）』を唱えていた。
ヒュンケルの剣は、後一歩のところで届かず、デボエラ達は飛び去っていた。
以前にも述べたが流石のヒュンケルもルーラ級のスピードには追いつけない。
それに体が癒えたとはいえ、2年間のブランクは大きく、彼の技量は少し衰えていたのだ。
大魔宮（バーンパレス）に乗り込んだ時のヒュンケルならば、取り逃がさなかったのだが…。
デボエラ
【今は、お主には勝てない事は理解しておる……人間風情の癖にお主は強い……恐らく魔界でも一勢力を築けるくらいにのう】
ギャック
【我らの野望の前に、貴様は必ず障害となろう……何れ貴様の首を貰い受ける】

デボエラ

【じゃが、我らの世界からこの世界に来た魔族は我らだけでない。せいぜい気をつけることじゃな。キィーヒッヒッヒッ！】

ヒュンケル

「くそっ……取り逃がしたか」

あたり一面に響く、デボエラたちの声が響き、ヒュンケルは拳を大地に打ち付けた。

☆★☆

こうして『偽サントハイム姫君誘拐事件』は一応、幕を閉じた。

アリーナの名を騙った少女の名前はメイといい、ヒュンケル達が推理したとおり、ちょっと調子に乗っていただけの旅芸人との事だ。

本人たちもすっかり懲り、特にメイは人が焼け死ぬ姿を見せられたので蒼白になっており、アリーナ達に侘びを入れてフレノールを後にした。

ヒュンケル

「いいのか？騙りを働いた者を捕らえなくて…？」

いくら悪気がなかったとはいえ、王族の名を騙ったのだ。

本来ならば、かなりの重罪になる。

アリーナ

「もう十分報いを受けているでしょう。二度とこんな事はしないだろうから、今回は許してあげるわ」
　ヒュンケル
「お前が良いと言うなら、それで構わんがな」
　そこへブライが会話に割り込んできた。
　ブライ
「では、姫様。明日になったら城に戻りますぞ」
　アリーナ
「何でよ!?」
　ブライ
「今回の件で解ったでしょう。一国の姫がお忍びで旅をすることがどれだけ危険なのが……」
　アリーナ
「イヤよー私はまだまだ旅を続けるんだから……旅をするのが嫌ならブライだけ帰ればいいわ。別に頼んで着いてきてもらったわけじゃないし……貴方たちが勝手に着いてきただけなんだからね!!」
　ブライ

「姫様！」
　言い合いを始める主従を見て、ヒュンケルは微笑んだ。
　ヒュンケル
「お前たちも苦労している様だなクリフト」
　クリフト
「解っていただけますか……ヒュンケルさん」
　ヒュンケル
「だが……確かにあの姫君に城で大人しくしているのは似合わんな……サントハイムという国には悪いが、あの姫には狭い城ではなく、広い大地で伸び伸びとするのが似合っている」
　クリフト
「……はい。ブライ様もああ言っていますが、内心ではそちらの方が似合っていると思っていますよ。でも、サントハイムの重鎮として、姫様の教育係として、それを認めるわけにはいかない立場ですからね」
　ヒュンケル
「…そうだな」
　ヒュンケルは、そのままこの場を後にしようとした。

アリーナ
「ちょっとヒュンケル……何処に行くの？」
ヒュンケル
「とりあえず今晩は宿に泊まって……明日、旅に出るつもりだ……」
アリーナ
「一人で？」
ヒュンケル
「無論だが……」
何故、神々が自分をこの世界に送り込んだのか理由は解らないが、元の世界に戻る為には何かをしなければならないのだろう。
旅をしていれば、その『何か』にぶつかるかも知れない。
それに、デボエラとギャックの件もある。
アリーナ
「ねぇ、ヒュンケル……それじゃ、しばらく私たちと一緒に旅をしましょうよ」
ブライ
「姫様、何を言われます!?」
アリーナ

「だって、あのデボエラとか言う奴等の話が真実なら、ヒュンケルはこの世界の人間じゃないんでしょ？だったら地理とかも疎いなんてものじゃないじゃない」

ブライ

「……確かにそうですが…」

アリーナ

「こうして出会ったのも何かの縁でしょう……ヒュンケルがこの世界に慣れるまで同行した方がいいんじゃないかしら。私としてもヒュンケルと手合わせをしたいし…」

元々アリーナは、武者修行の為にお忍びの旅をしているのだ。

そして強くなるには、強い者との手合わせするのが最も良い修行となる。

ヒュンケルならまったく申し分が無い。

それに、何となくだがアリーナはヒュンケルと一緒に居たかった。

それがどの様な感情なのか、アリーナ自身も気付いていなかった。

ブライ

「しかし姫様。確かにヒュンケル殿は悪人ではありませんが、異世界の人間などという得体の知れない者を同行させるのは……」

アリーナ

「イヤなら、本当にブライだけ城に戻りなさい！」

流石にブライの物言いに怒りを覚えたアリーナは、ブライを睨む。
ヒュンケル
「アリーナ。ブライ殿の言う事は最もだぞ……」
クリフト
「ですが、ヒュンケルさんの事を考えるなら確かに我々と同行したほうがよろしいかと。我々はともかく他の人はヒュンケルさんが異世界の人間とは知りませんし……ヒュンケルさんの世界と我々の世界とでは常識が違う所もあるかもしれません」
クリフトとしても微妙なところである。
クリフトはアリーナに対し恋慕の情を抱いている。
そして、だからこそアリーナがヒュンケルに対し好意を抱き始めている事にも気付いていた。
アリーナ自身もまだ気付いていない感情に……。
しかし、神に仕える神官として異世界からの迷い人を放って置くことも出来ない。
それにアリーナの件では嫉妬を覚えているが、クリフトもまたヒュンケルに対し敬意を抱き始めていた。
ブライも言っていたが、ヒュンケルの強さは凄まじい。
それほどまでの強さを得たヒュンケルに憧れを感じずにはいられなかった。

神に仕える神官とはいえ、クリフトも若い男である。
強さという者に憧れるのも仕方がないのかもしれない。
僧侶の中には、神に対する信仰とともに武道を嗜む者も存在すると以前、城の教会に勤める神父様から聞いたこともあった。
ブライ
「…クリフトも賛成か……では仕方ないのう」
結局、ブライもヒュンケルの同行を認めざる得なかった。
口は悪いがブライも、何だかんだで人が良い。
ヒュンケルの腕は認めるし、人倫も悪くは無い。
そして、ブライは気付いていた。
このヒュンケルという男は、とてつもない辛酸を舐めている事を……。
そうでなければこの若さで、アレほどの強さには到達できない。
一言では語れないほど、重い人生をきっと彼は歩んできたのだということを……。

アリーナの提案は正直、ヒュンケルには有難かった。

いくらヒュンケルとはいえ、まったく知らない土地で旅をするのは確かに無謀だ。
ヒュンケル
「…そうだな。では御言葉に甘え、しばらく同行させてもらおう……」
こうして、サントハイムの姫様御一行に加わる事になったヒュンケル。
彼は、この異世界の地で何を見、何を為すのか……この時点では誰にも解らなかった。

砂漠のバザーへ

フレノールを後にしたヒュンケルとアリーナ達は南に向かっていた。
目指すは砂漠で行われているバザーである。
先の偽姫誘拐騒動の事もあるので、まだブライは旅を続ける事に難色を示していたが、アリーナはまったく聞く耳を持たず旅を続けるのだった。
ブライ
「まったく、姫様には王女としての自覚という物がないんじゃから…」
クリフト
「まあまあブライ様。ヒュンケル殿の存在が姫様の好奇心を更に膨らませてしまったんですよ……何せ異世界の人間で、姫様ですらまったく歯が立たない達人なんですから…」
ブライ
「まったく……厄介な御人と知り合ってしまったわ……トホホ…」
前を歩いているヒュンケルとアリーナを見ながら、ブライはため息を吐いていた。

南の洞窟を越え、砂漠に足を踏み入れたその時、アリーナ達は怪物（モンスター）の群れに襲われた。
砂漠に棲息するミミズ『サンドマスター』3匹と二足歩行のドラゴン『コドラ』が1匹。
応戦する為、ヒュンケルが鋼の剣を抜こうとするとアリーナがそれを押しとどめた。
ヒュンケル
「アリーナ!?」
アリーナ
「ヒュンケルは手を出さないでくれる」
ヒュンケル
「何ッ…どういうことだ…!?」
アリーナ
「ヒュンケルが戦うと、あっという間に終わってしまうから……私の修行にならないのよ…」
アリーナは物見遊山ではなく、武者修行の為に旅に出てきたのだ。
そうでなければ、御供をクリフトとブライだけにせず、護衛部隊を引き連れてきただ

ろう。
本当はクリフトとブライすら連れず、一人で旅をする予定だったくらいだし……。
ヒュンケル
「…そうか……ならば、俺は手を出さず下がっていよう…」
ヒュンケルも納得し、引き下がる。
実戦に勝る修行はない。
ヒュンケルはその典型的な例を知っている。
弟弟子のポップがそうだ。
アバンと共にいたころのポップは、1年間修行したにも拘らず、甘えん坊な性格が災いし、全然目が出なかった。
初めて会った当初、ヒュンケルにとってポップは雑魚……とまでは言わないが、ダイのおまけ程度の認識だった。
しかし、アバンがハドラーに敗れ、ダイと共に魔王軍と戦っているうちに、着実に実力を付けていき、最終決戦において、ポップはヒュンケルでも勝てるかどうか解らないほどの魔法使いに成長したのだ。
アリーナ
「ありがとうヒュンケル。いくわよブライ!・クリフト!」

ブライ、クリフト
「はっ!!」

砂中から遅い来るサンドマスターを屠りながら、アリーナはコドラに向かって行った。
コドラはドラゴンの一種であり、この砂漠に棲息する怪物達の中ではそれなりに手強い。
通常の攻撃はともかく、ときおり放つ痛恨の一撃を喰らえば、並の戦士などは一撃で即死してしまう。
そして巨体でありながら、この砂漠に棲息する怪物の中では素早い。
それに砂漠ということもあり、砂に足を取られアリーナも自慢の素早さを生かすことができていないが、コドラの足は砂の上でも平地の様に動ける為、素早さはアリーナを上回っていた。
ブライ
「姫様…!」
クリフト

「危ない!!」
砂に足が取られるため、自慢のキックもいつものキレがない。
ヒュンケル
「ブライ殿……こういう時は敵の最も得意とする武器を潰すことです……」
クリフト
「敵の最も得意とする武器……ですか？」
ブライ
「コドラの武器……そうか。姫様、援護いたしますぞ…氷系呪文(ヒャド)！」
ブライの『氷系呪文(ヒャド)』がコドラの足を氷らせ、動きを止める。
そう、素早く動く敵ならば、その足を潰せばいいのだ。
アリーナ
「はあぁぁぁぁぁ！」
アリーナのキックが見事コドラの顎に決まり、コドラはその場に倒れこんだ。
ブライ
「ヒュンケル殿、助言(アドバイス)忝い」
クリフト
「よろしいのですか？姫様は手を出すなとおっしゃってましたのに……」

ブライ
「ヒュンケル殿が出したのは手ではなく口じゃ。熟練者からの助言を聞き、それを糧とするのも修行じゃ」
クリフト
「おや、ブライ様。姫様の武者修行をお認めになられたのですか?」
ブライ
「本心を言えば直ぐにでも城に戻っていただきたいのじゃが……まったく、一国の姫君ともあろう御方が…ブツブツ…」
ヒュンケル
「姫君だからといって、おしとやかでなければならない……というわけではあるまい」
ブライの嘆きにヒュンケルが異を唱える。
ヒュンケル
「俺の知人である姫君は、アリーナに負けないくらいお転婆姫だったらしいが……今では女王として立派に国を治めておられる」
言いたい事はずけずけと包み隠さず口に出し、物怖じせず活動的で他人の恋愛事情に興味津々で首を突っ込みたがる俗っぽいところもあるが、魔王軍の侵攻により父王が行方不明になったときは、それが逆にカリスマ性となり、配下と共に国を支え、勇猛果敢

な姫君として各国にその名を轟かせと、前大戦においての名を馳せたカール王国のフローラ王妃と並び称される存在となっている。
有事の際には、蝶よ花よと愛でられる姫よりも、レオナやアリーナの様な行動的な姫の方が求められるのかもしれない。
アリーナ
「ヒュンケル……砂漠のバザーが見えてきたわよ」
戦闘中は気付かなかったが、どうやら目的地に近付いていた様だ。
ヒュンケル
「…ほう、あれが砂漠のバザーか？」
アリーナ
「そう。フレノールで聞いた話じゃけっこう賑わいをみせているようよ…」
やはりアリーナも女の子……ショッピングに胸を躍らせているようだ。
アリーナ
「いい武器が買えればいいな……防具はいいの……ちょっと強力な武器があれば…」
ヒュンケル
「……（汗）」
普通の女の子とベクトルは違うようだが……。

クリフト
「…ひ……姫様……（涙）」
ブライ
「…どこで育て方を間違えたんじゃろうか？（涙）」
うきうきと心弾ませているアリーナと、それに呆れ気味なヒュンケル達はバザー会場に向かった。
そこで、とんでもない凶報が待ち受けているとも知らず……。

父

砂漠のバザーに到着したアリーナを待っていたのは……落胆だった。
確かに強力な武器は売っていた。
しかし、それはアリーナでは扱えなかったのだ。
クリフト
「私がこれを……」
ヒュンケル
「ああ。そのホーリーランスとやらはお前が使うといい……」
ブライ
「ヒュンケル殿は剣は達人じゃが、槍の心得はないのかな?」
ヒュンケル
「いや、槍の心得もある……が、剣程の腕ではないのも確かだ。それにこのホーリーランスの造りは。俺の槍殺法には不向きだ」
ホーリーランスは槍ではあるが、馬上槍(ランス)なので、ヒュンケルが独自に編み出した愛用の必殺技はともかく、アバン流槍殺法には合わない。

ランスは基本的に刃物が付いておらず、円錐型で相手を突き刺して攻撃するのが最も効果的な槍である。

ホーリーランスは、先端に刃物こそ付いているが、やはり円錐型なので、振り回し辛く、薙ぎ払いや足払い、巻き上げや格闘戦の補助の用途には使い勝手が悪い。

アバン流は、もともとアバンがカール王国騎士団に所属していた時、王城に攻め入ってきた魔王ハドラーを退けた際にとっさに放った技を完成させたモノである。

アバン流の基本は刀殺法であり、それを応用し、槍、斧、弓、鎖、牙などの殺法が編み出された。

その為かアバン流槍殺法には、槍術の基本とも云える『刺突技』が無い。

地雷閃も海鳴閃も斬撃であり、虚空閃は刺突と云えなくもないが、厳密にいえば穂先から闘気を発して相手を斬ると云った方が正しいだろう。

故に武器を選ばないアバン流でも、斬撃が出来ない馬上槍は不向きな武器と云わざる得ないのだ。

それでも、武芸百般のアバンならば上手く扱えるだろうが、ヒュンケルは師ほど器用ではなかった。

結局、武器はクリフト以外は収穫無しであった。
それでも、もの珍しい物が並んでいるバザーはアリーナの好奇心を刺激するので、それなりに楽しんではいるようだった。
しかし、そんな楽しみも長くは続かなかった。
サントハイム兵士
「あ！姫様、探しましたぞ！直ぐにお城にお戻り下さい！王様が、王様が大変なのです！」
★☆★
アリーナ
「お父様！どうして何も言ってくれないの？」
ブライの『瞬間移動呪文』で急ぎサントハイムに戻ったアリーナは、父であるサントハイム王と面会した。
しかし、サントハイム王は何か言いたそうにアリーナを見るだけで、何も喋らなかった。
王の声が出なくなった事が国民に知れると、不安が広がる事を恐れ、この事を知るのは王の間にいる数人のみだった。
なぜ突然、王の声が出なくなったのか……王が声を取り戻す方法は……。

アリーナ達は、「裏庭の部屋に住むゴン爺ならば何かわかるかも知れない」という大臣の助言により、裏庭に向かった。

一方その頃、ヒュンケルはサントハイムの城下町ともいえるサランの町で時間を潰していた。

旅の連れとはいえ、ヒュンケルはサントハイム王家には直接関係がない為、城内に入る事を遠慮したのだ。

宿を取る前に教会に行くと、二階から美しい歌声が聞こえて来た。

いかにヒュンケルが武骨者とはいえ、美しいモノを美しいと感じる感性くらい持っており、誘われる様に二階に上がり、その歌を静かに聴いていた。

ヒュンケル

「…久しぶりにいいモノを聴かせてもらった…」

詩人

「ご拝聴ありがとうございます。私の名はマローニと申します」

ヒュンケル

「俺は歌の事はよくわからんが……それでもお前の声が美しい事は理解できる……昔か

らそうなのか？」

マローニ

「いえ、私は一度喉を痛め、声が出なくなったことがあるんです……この声が出る様になったのはその後なのです」

ヒュンケル

「何か特別な事でも？」

喉を痛めた事により、この様に聴き惚れる声に変声したのだろうか？

マローニ

「実は、『さえずりの蜜』というエルフの薬を飲んだ事が要因です。昔、砂漠のバザーの道具屋で手に入れましてね……今年のバザーでも売っているかも知れませんね」

アリーナ

「さえずりの蜜？」

ヒュンケル

「ああ、マローニという詩人が言うには、その薬を飲んでから今の様な声になったとのこ

とだ」
　ゴン爺から「マローニならば王の声を治す方法を知っているかも」と聞き、ヒュンケルと合流したアリーナだったが、本人に直接聞く前に、ヒュンケルが既にその方法を聞いていたので、それを伝えられた。
　アリーナ
「砂漠のバザーで売っているんなら、明日直ぐにバザーに戻りましょう！」

　ブライの『瞬間移動呪文』で再びバザーに戻ったが、既に辺り一面は真っ暗になっており、肌寒くなっている。
　砂漠は湿度がないので日中は暑いが、夜はかなり冷える。
　当然、夜は店も閉まっているので、今日は宿を取り、明日の朝一に道具屋に赴き、さえずりの蜜を購入することになった。
　そして、深夜。
　アリーナ
「…ヒュンケル…起きてる？」

バザーの宿屋はテントなので、当然のことながらベッドではなく雑魚寝で、部屋が区切られていない。

ヒュンケル

「どうした?明日は早いのだろう…早く寝ないと起きられんぞ」

アリーナ

「ちょっと眠れなくて……だから眠くなるまで少し話しをしたいの…」

普段は元気一杯の少女だが、その心根は優しいので、父の事が心配なのだろう。

いつもは直ぐに眠りにつくのに、なかなか寝付けない様だった。

アリーナ

「お父様……周りの人たちを不安にさせない為に、今の状況を城のみんなに教えていないの…」

ヒュンケル

「…王がその様な状態になったことが知られれば、確かに動揺が拡がるだろうな……その為に緘口令を布いたか……」

アリーナ

「ねえ……ヒュンケルのお父様ってどんな人…」

ヒュンケル

「俺は実の親を知らん……」

アリーナ

「えっ!?」

ヒュンケル

「俺が生まれた頃、地上はハドラーという魔王の侵略を受けていた。そして俺の生まれたパプニカ王国のあるホルキア大陸は魔王軍の拠点、地底魔城が在った為、その大陸の町や村は魔王軍の襲撃を連日の如く受けていた。俺の両親は、殺されたのかそれとも、俺を見捨てて逃げたのか解からんな…」

アリーナ

「……」

ヒュンケル

「だから、俺にとって親とは……俺を育ててくれたバルトスという男だ」

地獄の騎士バルトス

旧魔王軍最強の戦士であり、当時の魔王ハドラーが生み出した怪物（モンスター）とは思えない程、騎士道精神に富んだ男である。

それがヒュンケルの養父・地獄の騎士バルトスである。

流石に、人間ではなく怪物である事は口にしなかった……。

アリーナ
「…その人はお元気なの？」
ヒュンケル
「…俺が6歳の頃に逝った」
アリーナ
「……!?」
ヒュンケルは長い間父(バルトス)は、ハドラーがアバンに敗れた為にハドラーからの魔力が途絶え、消滅したと信じ、アバンを憎んでいたが、真実は、騎士道精神と尊び、人間の様な情愛を持っていた事と、アバンを自らの意思で地獄門を通過させた責により、ハドラーに失敗作として処刑されてしまったのだ。
ヒュンケル
「…今でも俺は、父を尊敬している。あの人は正に武人の鑑だった…」
アリーナ
「ヒュンケルよりも強かったの？」
ヒュンケル
「…いや、今戦えば間違いなく俺が勝つ！」
所詮、バルトスは『地獄の騎士』という不死系怪物(アンデットモンスター)で、しかも『地獄の騎士』は『骸

骨剣士』系の中位種に過ぎない。
当時のハドラーでは、『地獄の騎士』が精一杯で、上位種である『ソードイド』、最上位種である『デーモンソード』を生み出すことは出来なかったらしい。
そして、ヒュンケルは暗黒闘気によって不死系怪物を束ねる『不死騎団長』。
不死系相手に遅れは取らない。
それに六大団長はそれぞれの分野において、魔軍司令ハドラーを上回る力を持つ者が選ばれる。
ヒュンケルは当時、剣技と暗黒闘気に長けていたので、当然、作ろうと思えば『ソードイド』なども作ろうと思えば作れた。
しかし、父への敬意からか、父と同じ種の不死系怪物は一切作らなかった。
ヒュンケル
「しかし、強さだけが武人の全てではない。父はその精神こそが真の武人だった……」
アリーナ
「……本当にお父様の事が好きなのね…」
アリーナは、ヒュンケルの話を聞きながら、自分の父の事を想った。
ブライと同じ様に何かと口喧しいが、それもアリーナの事を思ってのことだというのは理解していた。

何だかんだ言いながらも、アリーナは父を尊敬し、愛していたのだから……。
父の言い付けに背き、城を抜け出して武者修行の旅に出てしまったが、やはり、出来れば父に正式な許可をとって旅立ちたかった。
だからこそ、何としてでも父を救いたい。
アリーナは、決心を新たにするのだった。

予知夢

ヒュンケル達は、サントハイム王の失われた声を取り戻すために必要な『さえずりの蜜』を求め、砂漠のバザーから西にある搭を訪れていた。

詩人マローニの話では、『さえずりの蜜』は砂漠のバザーの道具屋で手に入れられるとの事だったが、あいにく昔、マローニが飲んだ分しかなく、エルフが訪れるという西の搭で手に入るかもしれない…という藁にも縋る思いで……。

この搭に棲息する『鬼小僧』、『鶏冠蛇』、『鎌鼬』、『ポイズンリザード』、『蝿男』、『人食いサーベル』、『プテラノドン』、『ドラゴンバタフライ』、『スペクテット』などが次々と襲いかかってきたが、父を救う為に必死になっているアリーナ達の敵ではなかった。

不意打ちをかけてくる怪物もいたが、それは後背を守るヒュンケルに阻まれ、アリーナ達に手を出す事は出来なかった。

あえて問題点を挙げると、高所恐怖症のクリフトが階を上がるに連れ、ぐちぐち泣き言を呟くのが鬱陶しかったくらいであった。

そして、最上階に辿り付いたアリーナ達は、水に囲まれた美しい花畑で戯れるエルフの姉妹であった。

アリーナ達に気付いたエルフは、嫌悪感を隠そうともせず、すぐに立ち去って行った。
その時、リースと言う名のエルフが薬を落としていき、それこそがアリーナ達の求める『さえずりの蜜』であった。
ヒュンケル
「それにしても……随分と嫌われたモノだな…」
ヒュンケルの世界にはエルフと呼ばれる存在は、天界以外にはいないので、ヒュンケルも会った事がなかった。
ブライ
「無理もありますまい……エルフたちからすれば我ら人間など、厄介者以外の何者でもないですからな」
アリーナ
「どういう事？」
ブライ
「エルフたちが流す涙は、『ルビーの涙』と呼ばれる宝石で、高値で取引されます。その為に欲深い者達によって地上に住むエルフ達はは迫害を受けておるのです。無論、そのような人間ばかりではありませんが……エルフたちからすれば、そんな区別はつかないでしょうからな」

ヒュンケル
「……」
ブライの言にヒュンケルは自分達の世界の人間たちの事を思い浮かべた。
かつてまだ大魔王バーン率いる魔王軍が行動を起こす前、ダイの親友である『ゴールデンメタルスライム』が勇者の名を騙る欲深い人間たちに攫われ、ロモス王に献上された事があったと聞いた事があった。
ダイは、デルムリン島の怪物達を引き連れ偽勇者たちを倒し、見事ゴメちゃんを救出した。
これにより、ダイはロモス王に『未来の勇者』と認められ、パプニカ王女レオナとの出会いや勇者アバンへの弟子入りに繋がる事となる。
人間すべてが、そのような者達ばかりではない。
ブライの言う様に、ヒュンケルの仲間たちにそんな者は1人もいない。
偽勇者たちも、大魔王との最終決戦において一役買っており、根っからの悪党というわけでもなかったが…。

ブライの『瞬間移動呪文』でサントハイムまで戻ったアリーナ達は、声の出なくなっ

た王に『さえずりの蜜』を飲ませた。
サントハイム王
「……ん?あー、あー……!おおっ!?こ…声が出るぞ!治った治った!」
病気が治った事を喜んだサントハイム王は、薬を持ってきてくれたアリーナ達に感謝すると、事の経緯を語り始めた。
王はここ最近、悪夢を見続けていた。
それは巨大な怪物が地獄から蘇り、すべてを破壊しつくすという、とてつもなく恐ろしい夢であった。
始めは誰にも語らず、己の胸の内に秘めておくつもりだったが、連日連夜同じ夢ばかり見る故、不安になってきたのだ。
サントハイム王家には代々、未来の事を夢に見る能力を持つ者が現れる。
王もその能力を持っており、この夢は予知夢なのではないか?
そう思った王は、大臣にその夢の事を話そうとしたのだが、その矢先に声が出なくなってしまったのだった。
サントハイム王
「アリーナよ。わしは、もう止めはせぬ。その目で世界を見てまいれ」
アリーナ

「ありがとうお父様」
サントハイム王
「うむ。それでは出発は明日にして、今日はこのまま城に滞在せよ…」
アリーナ
「はい、お父様」
ブライ、クリフト
「「御意！」」

その夜。
サントハイム王は、自室にブライを呼び寄せた。
ブライ
「何か御用でしょうか陛下？」
サントハイム王
「うむ。実はな……お前にだけは教えておこう思ってな。恐ろしい夢を見る前……アリーナが城を飛び出す前に、あやつに関する夢も見たのじゃ」
ブライ

「まさか!?姫様の身に何か起こるとでも」
サントハイム王
「いや、確かに一大事だが、どちらかと言えば個人的なことじゃ……」
サントハイム王が見たアリーナに関する夢とは……それはヒュンケルにも関係する事だった。
ブライ
「はあっ!?……鯉……淡水魚がどうかされましたか?」
サントハイム王
「現実逃避は止めぃ！『恋』じゃ!!」
ブライ
「あのお転婆の姫様が『恋』ですと……」
サントハイム王
「うむ。アリーナが銀髪の戦士を相手に恋をするという夢じゃ……こちらも何度も繰り返し見たのでな。心当たりはあるか?」
銀髪の戦士と聞き、ブライに思い当たる人物は1人しかいなかった。
確かに、アリーナは旅の間、何かとヒュンケルに視線を向けていた。
おそらく本人も気付いていないだろうが…。

サントハイム王
「その男が、アリーナの婿に相応しい男ならば良いのだが……」
サントハイム王にとって、アリーナの結婚に関しても頭の痛い問題である。
何せあのお転婆姫を任せられる者など、国の有力貴族には存在しない。
勿論、国のためには何れ、誰かを婿に取らなければならないだろう。
しかし、親として娘を任せるに相応しい相手を婿に迎えたいと願うのは当然と云える。
ブライ
（…確かにヒュンケル殿ならば、ひょっとしたら姫様を御せるかも知れん……しかし…）
サントハイム王
「ブライよ。もしその男が現れたら、アリーナに相応しいかどうか見定めよ。そして相応しかったら、わしに知らせるのじゃ」
難儀な命令である。
ブライは、ヒュンケルの事が嫌いなわけではない。
むしろ、敬意を払っている。
しかし、異世界の人間をアリーナの婿に迎える事が出来るのだろうか？
そもそも、あれほどの戦士なのだ。

元の世界に待っている女が居ても不思議ではない。

それに戦士としては確かに超一流だが、サントハイムの王位を継げるかどうかは別問題。

そちらも見定めねばならず、ブライの気苦労は絶えなかった。

王宮戦士との邂逅

旅の許可をもらったアリーナ達は、サランの町で待っていたヒュンケルと合流し、エンドールに向かうべく、サントハイムの南東部に位置する祠に向かった。

この祠にはエンドールへと続く『旅の扉』がある。

『旅の扉』とは、いわゆるワープトンネルの様なものであり、繋がっている場所に瞬時に移動する事出来る不思議な道である。

ヒュンケル

「この世界には随分と便利な物があるんだな」

クリフト

「ヒュンケル殿の世界には、『旅の扉』はないんですか？」

ヒュンケル

「ああ。聞いた事もないな」

クリフト

「まあ、私も利用するのは今回が初めてなんですけどね」

ヒュンケル

「そうなのか？」

クリフト

「はい。なんと言っても、サントハイムで旅の扉を利用した神官は私が最初と言う事になりますので」

やけに興奮しながら語るクリフトに、ヒュンケルは苦笑した。

そして、そんなクリフトを見てブライは、なにやら哀れみの表情を向けていた。

ブライ

（やれやれ……クリフトの奴も、自分にとって恋敵とも呼べる男相手に、よくそこまで無邪気に話しかけられるモノじゃな…）

サントハイム王の予知夢で、クリフトにとっての想い人であるアリーナは、ヒュンケルに恋をすると――否、すでに恋していると見て良いか――。

もともとアリーナは、クリフトの事を恋愛の対象とは見ていないだろう…。

アリーナはクリフトを、幼馴染であり、頼りない兄という感じで見ている。

クリフトも、その事を感じ取っている様だが……。

ヒュンケルと合流し、最初に昼食をとる時に、ブライはクリフトにそれとなく訊ねた

のだ。
　クリフト
「ブ…ブライ様!?」
　ブライ
「まさか、気付かれていないとでも思っていたのか?お前が姫様にホの字である事など、サントハイム城の者ならば、ほぼ全員知っておるぞ!」
　クリフト
「ええっ!?」
　ブライ
「知らぬのは当の姫様と、お前と接点がなかった裏庭のゴン爺くらいじゃわ!」
　実はサントハイム王もクリフトのアリーナに対する想いに気付いている。
　想う程度はやむをえないと思っているようだし、当のアリーナがまったくその気になっていないので、静観しているに過ぎない。
　ブライ
「姫様は、ヒュンケル殿に対し好意を寄せておる……女としてな。本人もまだ気付いておられぬが…」
　自分の気持ちにすら気付いていないのに、自分に対する好意に気付くはずがなく、ア

リーナはクリフトの事を幼馴染としか思っていない。
クリフト
「…解っております。今、姫様が誰に目を向けているか……くらい」
クリフトは常にアリーナを見ている。
故にアリーナの気持ちがどちらに向いているかくらい、直ぐに感じ取れた。
そして、自分に対しては、そんな風にまったく見ていない事など……。
元々、アリーナは色恋沙汰には疎い。
色恋よりも武の方に感心が強いからである。
そんな時に現れた、自分よりも遥かに強く、そして哀しみを宿しながらも澄みきった瞳を持つ男。
アリーナが惹かれるのも、無理はないのかもしれない。
クリフト
「確かに悔しい気持ちはあります。しかし、私もヒュンケル殿に敬意を抱いております。それに…私は何よりも姫様の幸せを願っています。もとよりこの想い、報われるとは思ってもいませんでしたから…」
神に仕える神官は、生涯不犯を貫かねばならない。
無論、抜け道はあるし、王族や貴族などに請われれば還俗しても良いのだが、アリー

ナの幼馴染とはいえ、今だ見習い神官でしかない自分が、王家に請われるというのは在り得ない。
アリーナが自分に対し、そういう想いを抱いてくれていれば、可能性はあったが……
クリフトはアリーナにとってそういう対象ではない様だ。
クリフト
「後はヒュンケル殿の気持ちかと……ヒュンケル殿が姫様の想いを受け入れられ、添い遂げる覚悟がお有りならば……そして姫様を幸せにしてくれると誓って下さるならば……私は神に使える神官として御二人を祝福しましょう…」

ブライ
（などと言っていたが……どうなるんじゃろうな？）
確かにクリフトの態度は立派なモノと云えよう。
神官としての自分の立場、アリーナの気持ちなどを考慮している考えだ。
しかし、本人の意思とは別に、炎とは燃え上がるモノ。
ブライも、若い頃にそんな想いを経験した事がある。
あれは、並大抵の自制心で抑え切れるモノではない。

まあ、クリフトは基本ヘタレだから、そこまで深刻に考えなくてもよいだろうが……。
ブライ
（ふむ。もしかしたら、姫に対する想いを抑える為に、信仰の道を選んだのかも知れんな）

旅の扉は、扉というよりも水が渦巻いているという外見をしていた。
ヒュンケル
「あれが旅の扉か？」
アリーナ
「この先に憧れのエンドールに通じているのね」
いつも好奇心旺盛なアリーナは、武術大会が開かれているというエンドールへの期待に目を輝かせている。
そして、ヒュンケル達は旅の扉を通り、エンドール地方北西部に位置する旅の扉に移動した。
初めて通った旅の扉に関する感想は……最悪の一言に尽きた。

アリーナ
「お腹も頭もぐちゃぐちゃだわ……」
アリーナは、旅の扉から掛かる負荷に酔ってしまい、ブライも咳き込んで気持ち悪がっている。
意外なのはクリフトで、彼は旅の扉の神秘的な仕組みに感動していた。
ヒュンケルも『瞬間移動呪文（ルーラ）』系の呪文やキメラの翼を用いず、転移させる旅の扉に興味を覚えていた。
ちなみにヒュンケルも、少し顔が青くなっているが、アリーナ達程ではない。
むしろ、平然としているクリフトが異常である。

旅の扉のある小屋から出ると、直ぐ横に宿屋が建っていた。
この旅の扉は、交易商人がよく利用するので、宿屋が完備されているのは当然なのかもしれない。
今回は、サントハイムから『瞬間移動呪文』を使わずに歩いて来た為、既に日が暮れている。
今日は、この宿屋に泊まる事にした。

宿屋に入り、受付を済ませ、部屋に向かおうとした時、一人の戦士が目に入った。
立派な口髭を生やし、その体は細身ながら見事に鍛え抜かれており、一目見て歴戦の戦士であると判る男であった。
しかし、ヒュンケル達がこの男に感じたのは、それだけではなかった。
何やら、不思議な感覚に惹かれているかの様に…。
それはどうやら向こうも同じだったらしく、こちらに向かって挨拶をしてきた。
戦士
「私はバトランドの王宮戦士ライアン。故あって祖国を離れ旅をしている」
ブライ
「ほう…バトランドの…」
バトランドとは、サントハイムから東の方にある国で、強力な王宮戦士を擁する国として知られている。
ブライも若い頃、使者としてバトランドを訪れた事があり、バトランドの王宮戦士の強さに感歎を抱いた事があった。
ブライは、祖国サントハイムを愛するが故に、他国を見下す傾向があるが、良い所は素直に認めている。
アリーナ

「私はアリーナ……サントハイムの王女よ」
クリフト
「姫様!?」
ブライ
「いきなり御身分を明かされるなぞ…」
ブライとクリフトは焦るが、アリーナは何故かこの男に対しては、何故か見分を隠す気になれなかった。
ライアン
「なんと姫君であらせられましたか、これは御無礼仕りました」
ライアンはその場に跪き、王族に対する礼儀に乗っ取り、敬意を表した。
ヒュンケル
「俺はヒュンケルだ、よろしく」
ライアン
「此方こそよろしく」
ライアンは立ち上がり、ヒュンケルと握手を交わす。
それと同時に、相手の実力を瞬時に見抜いた。
ライアン

（…強い！まさかこれ程の戦士がこの世に存在するというのか？）
ライアンは、目の前の男が自分を遥かに上回る戦士である事に悟り、驚嘆した。
ヒュンケル
（この男……只者ではない）
ヒュンケルも、ライアンの実力を感じ取っていた。
現段階ではアリーナよりも上であろう事も。
ライアン
「私は伝説の勇者を探す為、旅をしています。何れ世界の為に戦われるであろう勇者様を見つけ、お守りする為に…」
その後、ライアンと少し雑談をして別れた。
アリーナ
「何故かしら…あのライアンって人、不思議な感じしたわね」
クリフト
「初対面なのに、以前何処かで逢った事がある様な…」
ヒュンケル
「お前たちもか……実は俺もだ」
城にずっと居たアリーナはもとより、ヒュンケルはこの世界の人間ではない。

にも拘らず、この様な感覚に捕らわれるとは、奇妙だった
だが、ヒュンケルはそれよりもライアンの語った話の方が気になっていた。
勇者と聞き、ヒュンケルが思い浮かべたのはダイの事だった。
ヒュンケル
（もしかしたらダイは異世界にいるかもしれない）
地上にはいくら探してもいなかったダイだが、生きているのは確実である。
魔界か天界にいるかもしれないと予測していたが、もしかしたら自分や、デボエラ達の様に異世界に飛ばされている可能性もある。
元の世界に戻る方法を探すのと同時に、この世界にダイがいないか捜索して見るのもいいかもしれない。
その為に、このエンドールを拠点に活動を始めた方が都合がいい。
ブライの話では、エンドールは世界一の大国。
世界中から人が集まるので、いろいろな情報が手に入り易いだろう。
無意味に世界を歩き回るよりは、効率が良い。
ヒュンケル
（この国で、アリーナ達と別れる事になるかもしれないな）

謎の戦士デスピサロ

ヒュンケルとアリーナ一行は、遂にエンドールに到着した。
アリーナ
「ここがエンドール……憧れの武術大会が行われている国！」
ブライ
「まずは、国王陛下に御拝謁せねばなりませぬな。我がサントハイムとエンドールは同盟国ですからな」
クリフト
「既に、サントハイムから姫様が訪れる事は、伝えられております」
ヒュンケル
「では、俺が宿をとっておくから、お前たちは王に拝謁して来い」
アリーナ
「えっ!?ヒュンケルはいかないの？」
ヒュンケル
「ああ。特に王と会う必要性はないだろう」

クリフト
「では、ヒュンケル殿は武術大会に出場されないのですか?」
ヒュンケル
「見世物の大会にはあまり興味がないんでな。それにアリーナ以外の参加者は、大会で名を売り、あわよくば王国に仕官しようという者が殆どだろう。俺はこの国に仕える気はさらさらない」
ブライ
「下手にヒュンケル殿の強さを知れば、エンドール王はヒュンケル殿をとりたてようとなされるかも知れませんな」
ヒュンケル
「俺が仕えたいと思う国は、2つしかありません」
それは、師であるアバンが王となったカール王国と、自分の罪を許し正義の為に戦う道を指し示したレオナが女王を務めるパプニカ王国だけ……。
しかし、カールはともかくパプニカに仕官する事は出来ない。
女王や三賢者はともかく、他の重臣達がヒュンケルを警戒しているからである。
どれだけ償っても、ヒュンケルがパプニカを一度滅ぼした事実は消えはしない。
クロコダインが憧憬を抱いた様に、確かに人間は素晴らしい……が、バランが失望し

た様に人間は愚かしくもある。
怪物（モンスター）を含め、最も矛盾を内包している生命体が『人間』という種なのかもしれない。

宿を取ったヒュンケルは、アリーナ達が王に拝謁している間、酒場にいた。
どの様な世界であれ、酒場とは情報を収集するには打ってつけの場所である。
特に今は、武術大会を観戦する為、世界中から人が集まっているので、特に…。
???
「よう、兄ちゃん…1人かい？」
ヒュンケル
「いや、人を待っている…」
???
「そうかい……俺の名はスコット。兄ちゃんも武術大会の参加希望者かい？」
ヒュンケル
「いや、参加希望者の旅の連れだ」
スコット

「へぇ～…アンタほどの人が武術大会に参加しないとはね」
このスコットという男も、それなりの実力者のようだ。
最も、先に出会ったライアンという戦士よりは、遥かに劣るが……。
ヒュンケル
「アンタも武術大会に?」
スコット
「いや、俺は元々このエンドールで傭兵を生業にしている戦士でな……仕官には興味がないから、武術大会には参加しない」
ヒュンケル
「仕官……やはり、ほとんどの者はそれが目当てか」
スコット
「ああ。ここ最近、このエンドール周辺でも魔物が多く出没しているからな。国王はそれを対抗する為に強い者を集めているらしい……だが…」
ヒュンケル
「……!?」

ブライ
「まったく、この国のアホ……もとい国王陛下には呆れ返るわ！優勝者に姫君と結婚させるなどと軽はずみにも程があるわ!!」
アリーナは、エンドール王とモニカ姫から、武術大会で優勝してくれる様、依頼された。
最近の状況を鑑み、強い者を集める為に武術大会を開いたのはいいが、調子に乗って優勝者には娘であるモニカ姫と結婚させると言ってしまい、後になって後悔しており、同性であるアリーナが優勝すれば、結婚する事は出来ないので、丸く収まるとの事。
アリーナ
「ヒュンケルが参加しない以上、優勝は私に決まりなんだから、モニカ姫も望まない相手と結婚せずに済むってモノよ！」
ヒュンケル
「ほう、デスピサロという男が優勝間違い無しと噂になっているが……勝つ自信が在るのか？」
ヒュンケルは先ほどのスコットから聞いた事が引っかかっていた。
デスピサロ。

人とは思えぬ程の強さで現在ただ1人、5人抜きを果たしている。
ハンサムな顔立ちと、圧倒的強さで彼に憧れを抱く者が多数いる……しかし、デスピサロは対戦相手を全員殺しているので、恐れられてもいる。
武術大会は勝ち抜き戦で、5人抜きを果たした2人によって決勝戦が行われる事になっている。
つまり、既に5人抜きを達成したデスピサロは決勝進出が決まっており、もう1人の勝ち抜き者が決まれば、そのまま決勝戦となる。
アリーナ
「勿論よ。デスピサロは間違っているわ。試合は殺し合いじゃないわ！私がその事を思い知らせてあげるわ!!」
戦いである以上、試合中に死者が出てしまう可能性があるのは確か……しかし、最初から殺す事を前提にするのは間違っている。
それがアリーナの主張である。
ヒュンケル
「それ以前に、国の戦力増強が目的の武術大会で対戦相手を殺していては、意味がないな」
ヒュンケルも先ほどスコットに連れられ、大会を覗いて見た。

デスピサロは既に5人抜きを決めており、決勝戦の出場が決定しているが、それでも毎日の様に試合に出ている。
そして毎回、対戦相手を殺しているのである。
ヒュンケル
（あれではまるで……強い戦士を間引いている様にしか見えん）
そして何よりも問題なのが……デスピサロの実力はアリーナよりも遥かに上である点である。
今戦えば、間違いなくアリーナが敗北する。
そして、他の対戦相手の様にその命を絶たれる可能性が高い。
その時は……。
ヒュンケルはある決意を固めていた。

翌日、武術大会に出場する為、コロシアムに向かうアリーナ達だったが、突如ヒュンケルが違う方向に歩き出した。
クリフト
「ヒュンケル殿?」

ヒュンケル
「先に行け！」
そのままヒュンケルは、アリーナ達から離れていった。
アリーナ
「どうしたのかしら？」
ブライ
「はて？」
クリフト
「気になりますが、もうすぐ時間です。ヒュンケル殿の言われた通り、先に行きましょう」

アリーナ達とコロシアムに向かう途中、ヒュンケルはある男の影を見つけた。
昨日から感じるその男から発せられるモノが気になり、アリーナ達から離れ、その男を尾行する事にした。
ヒュンケルもかつては魔王軍六大団長の1人。
元の世界での仲間である占い師のメルル程ではなくても、悪しき者の気配にはそれな

りに敏感であった。
そして、ヒュンケルは目撃した。
その男――――デスピサロが、魔物と共にいる姿を……。
自分と同じく怪物に育てられ、怪物に対し差別意識のないダイや、マァムを慕う空手ねずみのチウの様な存在を知っているので、人と怪物が一緒にいても、ヒュンケル自身は気にしない。
しかし……デスピサロに付き従っている魔物は明らかに……野にいる怪物とは違う雰囲気をかもし出していた。
魔物
「……」
デスピサロ
「……」
距離が離れているのと、小声で話しているので、会話の内容はいまいち聞きとれないが、何かを企んでいる様だ。
デスピサロ
「誰だ!」
どうやら隠れて自分達を窺っている事に気付いたデスピサロは、ヒュンケルに対し

『閃熱呪文』を撃ってきた。
ヒュンケルはそれを飛び上がって難なく躱すと、デスピサロの正面に着地した。
デスピサロ
「人間……見たな！」
ヒュンケルがそれに答えようとすると、デスピサロは剣を抜き放った。
デスピサロ
「問答無用！死ね!!」
デスピサロの合図に回りに潜んでいたと思われる魔物達が一斉にヒュンケルに襲いかかってきた。
しかし……。
デスピサロ
「何だと!?」
5分と経たない内に、全員ヒュンケルに斬り伏せられた。
襲ってきた魔物達は、このエンドール地方に生息している者達ではなく、すべてデスピサロ直属の魔物達であった。
魔物
「デスピサロ様!?」

デスピサロ
「まさか、これ程の人間がいるとはな……貴様、武術大会の参加者か？」
ヒュンケル
「…いいや」
デスピサロ
「…そうか……強い者すべてが参加するわけではない……か」
デスピサロは先ほど抜いた剣を構えると、ヒュンケルに向かって斬りかかった。
ヒュンケルも、それを迎えるべく剣を振るう。
２人の体が交差する。
そして……ヒュンケルの頬に一筋の傷が出来ていた。
デスピサロ
「フフフ…本当に人間にしてはやるな…」
デスピサロは、自分が与えた傷を見ながら、不敵な笑みを向けた。
ヒュンケル
「……そんな減らず口が叩けるとは、浅かったか？」
デスピサロ
「…何…っどういう…!?」

ヒュンケルの言葉の意味を問い質そうとしたその時、デスピサロの胸部に激痛が走った。

デスピサロ

「ぐおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

なんと、デスピサロの胸部から血が吹き出していた。

さきほど交差した時のデスピサロの剣はヒュンケルの頬を掠めた程度だったが、ヒュンケルの剣はデスピサロの胸を斬り裂いていたのだ。

デスピサロ

「ば…馬鹿な!?」

斬られた事に気付かなかったデスピサロは、明らかに動揺していた。

その為、ヒュンケルの追撃に気付くのが遅れた。

直前に気付き、なんとか体を捻って躱すも、肩を斬られた。

もし、気付くのがあと一瞬遅ければ、デスピサロの首は、胴からさよならしていただろう。

魔物

「デスピサロ様!」

デスピサロ

「人間……貴様、名前は？」
ヒュンケル
「……ヒュンケル」
デスピサロ
「そうか……今日の所は私の負けだ。私はこれからするべき事があるので退くが…覚えているがよいヒュンケル。この屈辱は必ず晴らす！」
デスピサロは、そう言い捨てると部下と共に『瞬間移動呪文（ルーラ）』で、去って行った。
ヒュンケル
「デスピサロ……やはり今のアリーナではまず勝ち目がなかったな」
今回の戦いは、ヒュンケルが圧倒したが、それはデスピサロがヒュンケルを侮っていたのが原因だ。
そうでなければ頬の傷だけでは済まなかっただろう。
ブランクがあり、大魔宮（バーンパレス）突入時より弱体化している今のヒュンケルでは……だが。
デスピサロの実力は六大団長を上回り、昇格（プロモーション）前のヒムと同レベルといった所である。
アリーナには悪いが、ここでデスピサロを退けられて良かったといえよう。
もし、今回の事がなく、大会でアリーナと対決していれば、間違いなくアリーナは負

けていた。
その時、デスピサロがアリーナを殺そうとしたら、ルール違反を承知で試合に割り込むつもりだったのだから…。
ヒュンケル
「それにしても、奴のするべき事とは一体…？」
後にヒュンケルは後悔する事になる。
今ここで、デスピサロを討てなかった事を…。

武術大会

ヒュンケルがデスピサロと対峙していた頃、アリーナは控え室で試合に備えていた。
控え室にある道具屋で、自分にぴったりの武器『鉄の爪』を購入し、念の為に薬草も買い込んでいた。

アリーナ
「備えあれば憂い無し…って奴ね」

ブライ
「姫様にしては慎重ですな」

アリーナ
「自信はあるけど油断はしないわ。優勝するつもりなんだから、僅かの油断でそれを逃すのは悔しいじゃない。最後にそんな情けない姿をヒュンケルに見られたくないし…」

と、ここでアリーナの顔に翳りが浮かんだ。
昨夜、ヒュンケルと話した事を思い出したからだ。

アリーナ
「えっ!?ここで別れる?」
ヒュンケル
「ああ。このエンドールは世界一の大国。いろいろな人が集まる国だ。闇雲に世界を回っても手掛かりが見つかるとも思えんのでな。しばらくはこの国を拠点として、情報を集めたい」
ヒュンケルの目的は、元の世界に帰る方法を探す事。
今までアリーナ達と共に旅をして来たのは、異世界に跳ばされ右も左も解らない状況だったからに過ぎない。
しかし、異世界に帰る方法などそう容易く見つかる物でもない事も理解している。
だからこそ、拠点と呼べる場所が必要であり、世界一の大国であるこのエンドールならば、色々な情報が集まるだろう。
それに…。
ヒュンケル
「それに、いつまでも武者修行の旅に俺が同行するのは逆効果だろう…」
アリーナ
「そ…それは…」

今までの旅では、怪物（モンスター）の不意打ちには常に背後を守ってくれていたヒュンケルによって防がれていた。
これが普通の旅ならば、それでも良いが『武者修行』の旅において、それでは駄目だ。
実力が違いすぎるヒュンケルに守られる事で、無意識の内に依存し始めている事はアリーナも自覚していた。
アリーナ
「そうね。ヒュンケルに追いつく為には、いつまでもヒュンケルに頼っていちゃ駄目だよね」
アリーナは自分に言い聞かせる様に呟いた。

頭では理解している。
しかし、感情が拒否していた。
ヒュンケルと別れたくない。
これからも一緒にいたい。
そんな感情が、次々と溢れてくる。

でも、それと同時にヒュンケルと対等の強さを身に付けたいとも思っている。
ヒュンケルの横に立つに相応しい強さ、ヒュンケルと背中を任せ合える存在になりたい。
アリーナは、自覚した。
自分がヒュンケルにどの様な想いを抱いている事を……。
だからこそ…。
アリーナ
「ヒュンケルに無様な姿は見せられない。いつまでもヒュンケルに頼るような女が、ヒュンケルに相応しいなんて思えない。強くなって今度再会する時にヒュンケルに相応しい存在になる為に…」
★☆★
デスピサロとの戦いの後、ヒュンケルは急いでコロシアムに向かった。
アリーナがもう1人の連れがいる事を兵士達に伝えてくれていた様で、ヒュンケルは誰にも咎められる事なく、試合場に辿り付いた。
ブライ
「おお。ヒュンケル殿」
クリフト

「遅いですよ、もう姫様は４人抜きしていますよ」
ヒュンケルが到着する前にアリーナは、武闘家のミスターハン、クロスボウの使い手ラゴス、魔法の使い手（なぜかバニー姿）ビビアン、重厚な鎧戦士サイモンを次々と倒し、遂に決勝戦までリーチをかけていた。
進行役
「次の対戦相手は、ベロリンマンです」
勝ち抜き戦最後の相手は……なんと、長い舌を毛むくじゃらの魔物であった。
クリフト
「何故…怪物（モンスター）が…？」
ヒュンケル
「さあな……しかし、もし仮にアイツが優勝したら、姫君と結婚する事になるのか？」
ブライ
「いくら何でも怪物を王とするわけにいかんでしょう……と、言う事はあやつが優勝しても、ここの姫の結婚話なかった事になるのぅ」

試合開始と同時になんとベロリンマンが分身し、４体に増えた。

アリーナ
「な…何なのよコイツ!?」
アリーナは驚きながらも、右から二番目のベロリンマンに鉄の爪を振るった……が、スルリとすり抜けてしまった。
アリーナ
「コイツじゃないの!?キャア――――ッ!!」
空振ったと同時にベロリンマンが吐き出した火の玉の直撃を受け、アリーナはその場に倒れこんだ。
クリフト
「姫様!」
アリーナ
「だ…大丈夫よ…」
立ち上がったアリーナは、再びベロリンマンが分身するのを見て舌打ちした。
アリーナ
「今度こそ……!」
しかし、またも攻撃したのは本体ではなく、空振りした後、ベロリンマンに殴り飛ばされた。

アリーナ
「本物がわからなければ、どうしようもないじゃない……どうすれば…」
流石のアリーナも相手に翻弄され、為す術がなかった。
ヒュンケル
「アリーナ！目に頼るな!!」
アリーナ
「目に頼るな……!?」
ヒュンケル
「相手はただ分身しているだけだ。目で見るのではなく感じ取れ!!」
アリーナ
「目で見るのではなく…感じる…!?」
目で見たら惑わされる、耳で音を聞き分け様にも観客の歓声によってそれも困難な今の状況で、感じ取れとはどうすればいいのか…。
アリーナ
「…そういえば!?」

あれは、エンドールに来る前にクリフトと一緒にヒュンケルに稽古つけてもらった時の事。

クリフトとヒュンケルが模擬戦をしていた時、クリフトはヒュンケルに『幻惑呪文（マヌーサ）』をかけた。

『幻惑呪文』で惑わされたヒュンケルに、クリフトは後ろから攻撃を仕掛けたが、ヒュンケルの裏拳を顔面にくらい、鼻血を出しながらその場に蹲った。

ヒュンケル

「心眼を頼りにすれば『幻惑呪文』などに惑わされる事はない…覚えておけクリフト。そこいらの怪物ならともかく一流の戦士に対しては『幻惑呪文』など何の役にも立たん事を…」

アリーナ

「私に出来るかどうかわからないけど…」

やるだけの事はやって見ようと目を閉じた。

アリーナ

「……後にいるのは、クリフト、ブライ、そしてヒュンケル……そして私達を囲む様にあるのは観客たち……」

アリーナも城から飛び出して、これまで数多くの怪物達と戦闘を繰り返してきた。

その戦いの中で、相手の気配を探れるまで感覚を鋭く出来る様になっていたのだ。

そして、自分に対し敵意を向けている気配を察知した。

アリーナ

「タァァァァァァァァァァ!!」

目を開いたアリーナは、その気配に向かって必殺のキックを放った。

ベロリンマン

「グギャァァァァァァァ!!」

見事な会心の一撃が、ベロリンマンの顔面にヒットし、ベロリンマンはその場で倒れこんだ。

進行役

「アリーナ姫さま　5人勝ちぬき!」

こうしてアリーナの決勝進出が決定した。

★☆★

エンドール王

「アリーナ姫よ、よくぞ勝ち抜いた!さあ!これより、いよいよ決勝戦じゃ!デスピサロをこれへ!」
しかし、デスピサロは一向に姿を見せなかった。
兵士達が探しにいったが、デスピサロは姿をどこにもいなかった。
エンドール王
「いない者は仕方あるまい!武術大会はアリーナ姫の優勝じゃ!」
優勝の宣言と同時に観客達の大歓声が響き渡った。
クリフト
「姫様。優勝おめでとうございます!」
ブライ
「姫様!やりましたな!」
クリフトは感激の涙を流しながら、ブライも武術大会に出場する事にぶつぶつ言っていたにも係らず、今は素直に祝福していた。
アリーナはヒュンケルの方に視線を向けた。
ヒュンケルも自分の優勝を喜んでくれている…と、思ったがヒュンケルは何やら考え事をしているかの様に、対戦相手側の入場門を見つめていた。
ヒュンケル

（やはり、奴は何らかの目的を果たす為、武術大会を放り出したのか……奴の言っていた『するべき事』とは一体…!?」

告白…別れ

武術大会が終わり、エンドールではアリーナの優勝を祝う宴が催されていた。
調子に乗って姫を優勝者と結婚させると言ってしまい後悔していたが、優勝者が女性である為、それが流れ、エンドール王は大層ご機嫌になり、臣下達全員に一時金（ボーナス）を、城下町の住人全員には給付金を与えられ、その日の飲み食いの代金はすべて国から出されるという、大判振舞いを行った。
流石は世界一の大国……その財力も隣国とは比べ物にならないだけあり、それだけの金を使っても、国庫には充分余裕があるようだ。
この宴の主役であるアリーナは、探し人を求め町をさまよい歩いていた。
時々、エンドールの貴族や町の有力者などから声を掛けられたが、表面上は礼儀正しくしながら適当に切り上げていた。
いかにお転婆とはいえ、一国の王女である為、社交界にはなれており、その手の対処もお手の物であった。
アリーナ
「ヒュンケル……どこにいるのかしら…」

短い付き合いだが、ヒュンケルの性格はある程度理解出来ている。
彼は、こういう宴に積極的に参加などしないだろうから、どこか人気(ひとけ)の無い場所にいるのではないか…と、そういう場所を探していた。
予想通りヒュンケルは、今は無人になっている店舗の裏に腰掛け、1人で飲んでいた。
ヒュンケル
「アリーナか…」
アリーナ
「こんなところにいたの?」
ヒュンケル
「騒がしいのは苦手でな…」
アリーナはヒュンケルの横に座ると、持っていた酒瓶を差し出した。
ヒュンケル
「……何だ?」
アリーナ
「さっき、この国の元・将軍だというおじさんに貰ったのよ……かなりの銘酒で秘蔵のモノだったらしいけど…」
確かに将軍という雰囲気の精悍な男で、アリーナの実力に感嘆したとの事だ。

ヒュンケル
「その様な貴重な物をあっさりと渡すとは……なかなか気前の良い将軍のようだな」
アリーナ
「それに、若い頃痛飲したのが祟って、今は医者から一滴も飲んじゃ駄目って言われているらしいわよ」
ヒュンケル
「しかし、そんな銘酒を俺に渡していいのか？」
アリーナ
「……今日で、しばらくお別れだし……一緒に飲もうと思ったの…」
ヒュンケル
「……そうか…ならば御相伴に預からせてもらおう」
ヒュンケルは酒瓶を開封すると、アリーナの自分のグラスに注ぎ、口に含んだ。
確かに秘蔵の銘酒というだけあり、口当たりもよく、悪酔いなどしそうもない上品な味わいの一品だった。
しばらく無言で、酒の味を楽しんでいると、アリーナが自分に熱い眼差しを向けている事に気付いた。
ヒュンケル

「……アリーナ…酔ったのか？」

アリーナ

「うん。ちょっと酔っているけど、意識ははっきりとしてるよ……最後にヒュンケルに伝えたい事があるの…」

これからヒュンケルに伝える事は、初心なアリーナにとって闘いに望む以上に勇気が必要で、酒の力を借りなくてはとてもではないが言い出せない事だった。

アリーナ

「ヒュンケル……私…ね……ヒュ……ヒュンケルの事が……す…好き…」

ヒュンケル

「…!?」

突然の告白に、ヒュンケルは目を見開いた。

まさか、一国の王女であるアリーナが、自分に対しそんな感情を持っているとは思いもよらなかったのだ。

アリーナ

「ヒュンケルは、この世界の人間じゃない……そして、方法を見つけたら、元の世界に戻ってしまう事もわかっている……もしかしたら、これが最後の別れになるかも知れない……だ…だから…伝えたかったの…」

本音を言えば戻って欲しくない。
自分がヒュンケルと並び立てる程、強くなったら……ずっと自分の傍に居てもらいたい。
それが駄目なら自分も連れて行って欲しいとも思わないわけではないが、国と父を捨てる事に抵抗がある。
王女の身分はどうでもいいが、自分を愛してくれる父を哀しませたくない。
父の声が出なくなった時、自分がどれほど父を慕っていたのを、思い知らされたのだから。
ヒュンケル
「…アリーナ……俺はお前に相応しい男ではない…」
アリーナの突然の告白に戸惑ったが、ヒュンケルの返事は決まっていた。
ヒュンケルは、自分は人を不幸にしか出来ないと思っている。
ましてや、一国の王女であるアリーナに対し、呪われた魔剣戦士であった過去を持つ自分などとその様な仲になって良いはずがない。
ヒュンケル
「俺は罪深い男だ……かつて、この身を憎悪に染め、師や弟弟子を殺そうとし、人間を滅ぼそうとしたのだから…」

ヒュンケルは、己の過去を語った。
孤児となり、怪物（モンスター）に育てられた事を…。
父を殺した勇者を憎み、かたきを討つ為に勇者に師事した事を…。
そして、師が父を殺したのではなく、父を生み出した魔王（ハドラー）が真の仇であり、師は父に自分の事を託されたのだという事を…。
そうとも知らず、『魔王軍、不死騎団長』として、不死系怪物（アンデットモンスター）を率い、パプニカ王国を滅ぼした事を…。
アリーナ
「じゃあ、以前に言ったお父さんというのは……」
ヒュンケル
「…『地獄の騎士』という不死怪物だ……だが、以前に話したように不死怪物でありながら、武人の鑑であり、今でも『父』だと思っている」
ヒュンケルにとって養父であるバルトスと師であるアバンの二人は、最も尊敬する存在である。
ヒュンケル
「レオナ姫……いや女王によって既に裁かれてはいる」
氷炎将軍フレイサードの手より、レオナを救い出した後、パプニカ王国を滅ぼした事

に対する裁きを求めたヒュンケルは、『これよりアバンの使徒として、正義の為に生きろ』という裁きを受けた。
過去に囚われ、己の未来（みち）への歩みを止める事を禁じられた。
故に、ヒュンケルは立ち止まらない。
しかし、だからといって罪が消えた訳ではない。
その罪を背負い、『アバンの使徒』としての道を歩む。
それが生涯、ヒュンケルに課せられた贖罪の道なのだ。
ヒュンケル
「それに俺は人を幸せには出来ない…不幸にしか出来ないんだ。だから……俺への想いは忘れた方がいい」
ヒュンケルは、かつてポップとエイミに言った台詞を言い残し、アリーナから離れて行った。
アリーナ
「……」
ヒュンケルの過去を聞いたアリーナは、流石に驚愕していた。
怪物に育てられ、勇者に師事しながらも、人間の敵となり、一つの王国を滅ぼした。
一般論から見れば、その様な男が一国の王女の恋の相手には相応しくないのだろう。

自分だったらどうだろう?……と、アリーナは考える。
そんな『罪』を背負いながら、前を進んでいけるだろうか?
ヒュンケルは、どれだけ無様であろうとも、泥を啜っても『贖罪の道』を生き続けようとしている。
果たして、自分にそんな真似ができるだろうか…。
あっさりと命を絶って、『罪』から逃げようとするのではないか?
アリーナ
「ヒュンケル……やっぱり私は今のままじゃ貴方に相応しくない…。もっと強くなって……罪を背負う貴方の支えになれる様に…」
アリーナは立ち去っていくヒュンケルの背中が見えなくなると、そう呟いた。
ヒュンケルの過去を知っても、その想いは消えなかった。
むしろ、ますます膨れ上がっていた。
『罪』を知るからこそ、ヒュンケルはどこまでも優しくなれる。
どこまでも強くなれるのだろう。
しかし、それはとても苦しい事だ。
ヒュンケルが『罪』を忘れる事は許されないだろう。
忘れていいほど、軽い『罪』では無いと、アリーナも思う。

しかし、その苦しみを少しでも和らげざせてあげたいと思うのはいけないことなのか？

贖罪の道を歩く彼を支える者が『王女』であってはいけないのだろうか？

彼を赦し、贖罪の道を指し示したのが王女ならば、道を歩む彼を支えるのも王女であっていい筈だ。

アリーナ

「だから……私は忘れない…」

しかし、運命は非情であった。

エンドール王に挨拶を済ませ、父王に武術大会優勝の報告に戻ろうとしたアリーナ達の前に、傷付いたサントハイムの兵士が訃報を持ってきたのだ。

慌てて戻ったアリーナ達を待っていたのは、無人となったサントハイムの城であった。

サントハイムの人々はどこに行ったのか……。

その謎を探る為、アリーナはヒュンケルへの想いを必死に押さえながら、旅にでるのであった。

そして、サントハイムの訃報は、傭兵としての生業を営む事にしたヒュンケルの耳にも届いた。

ヒュンケル

「……まさか!?」

ヒュンケルの脳裏に、武術大会を放棄し、魔物と共に去ったデスピサロの事が浮かんだ。

時期から見ても、その関連性が疑える。

ヒュンケル

「くっ……あの時……あの男にトドメを刺しておけば……すまん…アリーナ…」

あの時、デスピサロを取り逃がした事に後悔を感じるヒュンケルであった。

第一章　お転婆姫の冒険……完

第二章　武器屋トルネコ

武器を求めて

アリーナ達と別れてから数ヶ月が過ぎた。
エンドールで知り合った傭兵スコットの伝手で、傭兵稼業を始めたヒュンケルの名は、瞬く間に広まって行った。
傭兵と言っても、戦時下ではないので仕事の内容は護衛が殆どであるが、それを差し引いてもその業界では名を馳せていた。
護衛成功率９９パーセントを誇り、その剣の腕は間違いなく超一流。
その腕に惚れ込む依頼者もかなり居り、専属で契約する事を望む者も数多くいた。
数ヶ月前に開かれた武術大会に出場していれば、優勝者であるアリーナ姫ですらも敵わなかったかも知れない…と、噂されていた。
その噂を耳にしたエンドールのモニカ姫は、彼が出場しなかった事にホッと息を吐いたとの事。
無論、彼がアリーナの関係者であることは知られていない。
傭兵稼業を始めて半年も経たない内に、ヒュンケルの報酬額は、５日間で３０００Ｇ

となっていた。
これは、スコットの４００Ｇの７．５倍である。
何故、これ程の高額となったのか……理由はヒュンケルの強さが他の傭兵たちと段違いどころか桁が違う為、他の傭兵たちの仕事が激減してしまう恐れがあったからだ。
傭兵の商売道具は強さそのもの。
格下の実力と価格が変わらなければ、客は皆、格上の方ばかりに行ってしまう。
まあ、ヒュンケルの体は一つしかないから、彼が他の誰かに雇われている間は他の傭兵たちを雇わなくてはならないが……。
但しヒュンケルにとって、傭兵はこの世界で生きていく為の手段に過ぎず、傭兵ギルドに正式に加盟しているわけではない。
その為、ヒュンケルは相手が気に入ったならば、無償同然……建前として出世払い……で仕事を請ける場合もあった。
そんな中、ヒュンケルを悩ませる問題があった。
元の世界に戻る手段やダイがこの世界にいる可能性は殆ど憶測なので、数ヶ月で見つかる筈もないので置いておいて、深刻なのは武器の件である。
ヒュンケルが現在装備している『鋼の剣』は一人前の戦士が持つに相応しい剣である。
そう……『一人前』の戦士であって、『超一流』の戦士ではない。

市販されている大量生産品としては手頃なモノでしかない。
ヒュンケルは子供の頃は兎も角、大人になってからは自分に見合う最高の武器を常に使い続けてきた。
魔王軍の不死騎団長だった頃に大魔王バーンから下賜された魔界最高の名工ロン・ベルク作『鎧の魔剣』、そして、最大の強敵にして戦友ラーハルトから受け継いだ同じくロン・ベルク作『鎧の魔槍』。
ともに、あちらの世界では最強であるオリハルコン製の『ダイの剣』、『真魔剛竜剣』、『覇者の剣』に次ぐ超一流の武器である。
竜の騎士の『竜闘気（ドラゴニックオーラ）』ほどではないにしろ、ヒュンケルの技量も並みの武器で持たない。
激戦という程の闘いはしていなくても、数ヶ月で鋼の剣と鉄の槍はヒュンケルの技量に耐え切れず、ところどころ細かい皺が入っていた。
スコット
「そろそろ武器の替え時か……すまんな…俺たちが原因でもある」
ヒュンケル
「いや、気にするなスコット」
実はヒュンケルはそれ以外にもスコットや他の傭兵たちの訓練にも付き合っていた。

彼らもプロの傭兵としての意地があるので、商売道具である自らの腕を上げる必要がある。

そして、目の前に最高級の技量の持ち主がいるのだ。

彼の剣を学ぶのは流石に無理でも、模擬戦を行うだけでもかなりの経験値を得る事が出来るので、仕事が無い日などは訓練に付き合ってもらっていた。

ヒュンケルは剣に比べれば、槍は素人だが、それでもアバン流槍殺法を扱えるので並みの槍使いよりは遥かに技量が上である。

スコット

「しかし、武器を替え時とはいえ、このエンドールではお前に見合う武器が無いぞ…何しろここの兵士なんぞ、正規兵でありながら『銅の剣』を使っている有様だからな…」

ヒュンケル

「……」

世界一の大国の兵士の装備がそれでいいのか…と、いう疑問が出るがこれはある意味仕方が無い。

何しろこのエンドールは現在、深刻な武器不足に悩まされているのだ。

隣国ボンモールに向かう橋が何者かに壊されて以来、武器の輸入が難しくなったのだ。

他の大陸からの定期船も滞りがちで、次に来るのはサントハイム地方の砂漠のバザーが終了した後との事だ。
ちなみにカジノには『隼の剣』という一流の武器が景品に出されているが、現在、休業中のため、手に入れる事が出来ない。
そもそも、ヒュンケルはそれ程運が良いわけでもないし、賭け事には余り興味が無いので、難しいだろう。
ヒュンケル
「鋼の剣を買う金があっても現物がなければ手に入らん。やはり、隣のボンモールに行かなければならんか」
スコット
「しかし、橋が壊れて……」
ヒュンケル
「別にあの程度の河など橋などを渡らなくても軽く越えられる」
スコット
「……泳ぐのか？」
ヒュンケル
「季節的に好ましくないな」

今は秋の中ごろ。
寒中水泳というほどではないが、河の水温は、かなり冷たい。
リザードマンであるクロコダインの様に水陸両用の獣人ならともかく、人間であるヒュンケルには少しキツイ。
スコット
「…じゃあ…」
ヒュンケル
「跳び越えればいいだけだ」

エンドールとボンモールを分ける河は大河というわけではないが、それなりに広い。
しかし、ヒュンケルはそんな河を易々と跳び越えてしまった。
そう、河の岸から岸までは流石に無理でも、橋の壊れた部分の端と端くらいならば、ヒュンケルの跳躍力を持ってすれば容易かった。
スコット
「……やはり実力の違いを思い知らされるな…」

★☆★

エンドールの隣国に位置するボンモール。

そこは、エンドールとは逆に武器が豊富で、防具が不足していた。

その為、国自体が防具を定価よりも高く買い取っていた。

そして、豊富は武器は……。

ヒュンケル

「最高が鋼の剣か……これではまた数ヶ月しか持たんな」

確かに鋼の剣は一人前の戦士が持つ武器として攻撃力も値段もお手頃なモノだが、数ヶ月に一度交換していては、流石に出費が激しい。

ヒュンケルも人間である以上、生活にも金が要るし、元の世界に戻る為の情報収集にもそれなりの金が必要である。

ヒュンケル

「あと1ランク上の武器が欲しいな……中古品でもいいから」

???

「それならば、北方にあるレイクナバを訪ねてはいかかでしょうか？」

ヒュンケル

「お前は？」

???

「私は旅の行商人です。北方にあるレイクナバの町の武器屋は、普段はこの檜の棒や棍棒、銅の剣しか売っていませんが、たまに掘り出し物を売るときがあります。運が良ければ、いい武器が手に入るかも知れませんよ」

ヒュンケル

「……なるほど、駄目だったら『鋼の剣』で我慢すればいいか。礼を言う」

旅の行商人

「いえいえ、ところで何か買って行かれませんか？」

ヒュンケル

「ちゃっかりしているな。まあいい、『薬草』と、あと『キメラの翼』を貰おうか」

旅の行商人

「毎度あり！」

こうしてヒュンケルは、僅かな期待を求め、レイクナバに向かうのだった。

旅の行商人

「……異世界の戦士、ヒュンケルよ……その村で貴方は新たなる『導かれし者』に出会うでしょう……どうかマスタードラゴン様の望みを叶えて下さい」

ヒュンケルを見送った旅の行商人の背中に翼が生え、天空に向かって飛び立った。

世界一の武器屋を目指す者

ボンモールの北方に位置する町、レイクナバ。
ここに、トルネコと言う名の商人が住んでいた。
今は雇われの立場だが、いずれは自分の店を持ち、世界一の武器屋になる。
それが、彼の夢だった。
商人としての立場では雇われだが、恐らくレイクナバ一恵まれた人間とも言える。
肥満体のおじさんという風体にも関わらず、気立てが良く町一番の美人と評判のネネという女性を妻とし、可愛い息子もいる。
町の人は、何故トルネコとネネが結婚したのか、今でも不思議に思っていた。

トルネコが働く武器屋は、品揃えが『檜の棒』、『棍棒』、『銅の剣』という、それほど大きな武器屋と言う訳ではないが、時折、掘り出し物を店頭に出す事があった。
大抵は『クロスボウ』や『くさり鎌』の様な、銅の剣よりもちょっと強い程度の武器だが、今回はなんと『破邪の剣』という鋼の剣以上の武器が出てきた。

入手経路は、旅の神官がソレッタ地方にあるミントスいう名の町で万が一の為の予備として購入したが、彼には装備する事が出来ず、売りきたらしい。

余談だが、その男はエンドールのカジノで『隼の剣』を景品交換してしばらく装備していたとの事だ。

『隼の剣』はとても軽量で、達人が持てば神速に達すると言われる程の武器だが、その男の技量ではそこまでははにはならず、その軽さ故に手に入れてから半年と経たずに駄目にしてしまったらしい。

そこで予備として買った『破邪の剣』を装備しようとしたら、装備出来なかったという間抜け振りを発揮していた。

その男は神職者としては有能だが、残念ながら戦士としては二流どころか三流レベルだったらしい。

ついには同行者から、回復呪文や補助呪文に専念してくれと通告され、無用と化した武器を売りに来たとの事だ。

トルネコは、夢を追う為にいずれ旅に出ようと思い、旅に必要な装備を買うため、いままでコツコツと貯金していた。

金は貯まっていたので、『破邪の剣』を店頭には出さず自らが購入した。

防具なども町の防具屋では最も守備力の高い『青銅の鎧』を購入しており準備はほぼ

整っていた。

働きながら、レイクナバの北方にある洞窟に赴き、旅をしながら貯金するのに有用な『鉄の金庫』を手に入れ、明日にはボンモールに向けて出発しようと考えていた。

そして、閉店時間３０分前、一人の戦士が来店した。

★☆★

レイクナバに到着したヒュンケルは、武器屋に直行した。

既にあたりは薄暗くなっており、屋外にある道具屋は既に店じまいしている。

早く行かなくては閉店してしまう。

トルネコ

「いらっしゃいませ、ここは武器屋で……」

客として入ったヒュンケルに応対をした恰幅の良い商人……トルネコは目を見開いた

彼は雇われの身とはいえ、武器屋としての鑑定眼は一流の域に達していた。

その彼から見て、目の前の戦士は、とてもこの店の武器が釣り合う様なモノではなかった。

この店の武器は、どちらかといえば駆け出しや実力の低い戦士の為であり、超一流の戦士に相応しいモノではないのだ。

何より、トルネコは目の前の男に奇妙の感覚が芽生えていた。
それはヒュンケルも同様だった。
ヒュンケル
（この感じ……そうだ確かライアン殿と出会った時に感じたあの感覚と同じ……これは一体…？）
トルネコ
「……失礼しました。どの様なご用件でしょうか？」
ヒュンケル
「ああ。売っている物を見せてくれないか？」
トルネコ
「……こちらです」
トルネコは苦渋を噛み締めながら、武器リストを見せた。
目の前の戦士……明らかに今までで出会った中で最高クラスの戦士にこの店の武器は似つかわしくない。
出会うのが早過ぎたのか……夢を叶え、世界一の武器屋になった時に彼と出会いたかった。
そうすれば、この最高の戦士に最高の武器を売ることが出来ただろうに……。

ヒュンケル
「これだけか？」
リストを見たヒュンケルの顔に失望が浮かんでいた。
どうやら今回は掘り出し物はなかった様だ。
そんなヒュンケルの顔を見て、トルネコの脳裏にある考えが閃いた。
トルネコ
「お客さん。この剣などはどうでしょうか？」
トルネコが差し出したのは、先日彼が蓄えを出して購入した掘り出し物『破邪の剣』であった。
ヒュンケル
「この剣は…!?」
トルネコ
「これは売り物ではございませんが、『破邪の剣』という武器でございます。『鋼の剣』より攻撃力が高く、さらには『閃熱呪文』の力が込められております。一人旅の戦士や商人などに親しまれている一品です」
ヒュンケル
「…ほう…！」

『鋼の剣』を上回る切れ味を更に『閃熱呪文』が使えるのは便利だろう。
前の世界には存在しない剣なので、鋼の剣よりも少し攻撃力が上程度の武器にヒュンケルの興味を引いた。
何より、魔法が篭っている剣は、普通の剣よりも耐久力が上なので、使い勝手も鋼の剣よりもいいだろう。
ヒュンケル
「しかし、これは売り物ではないのだろう」
トルネコ
「確かにこれは私個人が使う為に購入した剣ですが、私が使うよりもお客さんに使って頂く方が良いでしょう……その代わりと言っては何ですが……私の旅に同行して頂けないでしょうか？」
トルネコは自身の夢を語った。
今は人に使われる身だが、何れは自分の店を持ち世界一の武器屋になるのが夢だと…そして、明日からその夢を追う為に旅に出る予定なのだと…。
トルネコもある程度は武器を扱う事が出来るが、やはり一介の商人に過ぎない。
レイクナバ周辺の怪物（モンスター）程度ならば何とか戦えるが、数が多ければやはりプロフェッショナルの様にはいかない。

トルネコ
「貴方はエンドールの傭兵ギルドの一員でしょう」
ヒュンケルは仮とはいえ、一応ギルドの一員なのでギルドの紋章を胸に着けていた。
トルネコ
「この破邪の剣は、中古とはいえまだ一度も使われていない新品同様です。どうでしょう？この剣を担保に私に雇われませんか？」
ヒュンケル
「さて…どうしようか」
店を持つ為に旅に出るというが、店などそう簡単に持てるモノでもない。
余程の幸運に恵まれれば兎も角、常識的に早くて数年、遅ければ１０年以上は掛かるだろう。
『破邪の剣』は確かにエンドール、ボンモール、サントハイム地方では、最高の武器だろう……ヒュンケルの技量に合うわけではないが…。
それにヒュンケルの雇い賃は、５日間３０００Ｇ…破邪の剣の値段は３５００Ｇ。
単純計算で６日未満程度でしかない。
いくら何でも僅か６日で店など持てるはずが無い。
しかし、何故か断るのを躊躇ってしまう。

先ほどこの男から感じたアリーナやライアンと出会った時の様な惹かれる様な感覚。
それが気になるのだ。
ヒュンケル
「俺の料金は5日間３０００Ｇだ、その破邪の剣の値段の５／７に相当するぞ」
トルネコ
「…エッ!?」
目の前の戦士が凄腕とは思っていたが、まさかそこまで高額とは流石のトルネコも思いもしなかった。
ヒュンケル
「だが、おれは傭兵ギルドの客員(ゲスト)だ。なので6日以降からは出世払いにしてやろう」
トルネコ
「と、いうと…?」
ヒュンケル
「つまり、最初の5日間と6日目の夕方までは正式契約として雇われよう。それ以降は出世払い、お前が店を持てた時に纏めて払ってもらう」
トルネコ
「と、いう事は店を持つまで同行していただけると…?」

ヒュンケル
「そうは言っていない。俺は傭兵が本業ではなく、ある目的を持っている。その目的に関する情報が手に入れば其方を優先するが、それまではお前に雇われてやろう」
元の世界に戻れる手段、もしくはこの世界にいるかも知れないダイに関する情報が手に入れば、そちらを優先するが、それまではトルネコに付き合うと言っているのだ。
トルネコが店を持つまでに元の世界に戻れるのならば、タダ働きなってしまうが、傭兵は生活費を稼ぐ為の手段に過ぎないので惜しくはない。
ヒュンケル
「無論、雇われている間の旅費に関してはお前に持ってもらうが…それでいいか?」
トルネコ
「願ってもありません。よろしくお願いします。ではもう直ぐ閉店なので、店の前で待っていて貰えますか?」
こうして、ヒュンケルとトルネコの奇妙な旅が始まろうとしていた。

エンドールの武器事情

トルネコの護衛を引き受け、ボンモールに戻ったヒュンケルが見たのは直されていた橋であった。

なんでも中々到着しなかったドン・ガアデという建築士をボンモールに行かせたのはトルネコの御蔭であったらしい。

レイクナバの住人であるトムという老人の息子で、村から飛び出したサムという若者が、ボンモールでコソ泥を働き捕まっていたのだが、狐に化かされたドン・ガアデを救う為にサムが飼っていた狐狩りの得意な犬によって、ドン・ガアデを救った功績により、恩赦されたらしい。

トルネコは橋が直るまで、レイクナバで雇われ武器屋の仕事をしていたらしい。

そして、エンドールに行きモニカ姫に謁見し、ボンモール王子リックの親書を渡す依頼を受けていたらしい。

ボンモールは、大国エンドールに戦争を仕掛け侵略したいらしいが、モニカ姫と恋仲になっていたリック王子はその事をエンドール王に伝え、なんとか戦争回避を図ろうとしていたらしい。

確かに、今エンドールに滞在しているヒュンケルから見ても、ボンモールがエンドールに戦争を仕掛けるのは無謀に等しい。

エンドールが武器不足に悩まされているとはいえ、兵力差はかなりのモノだ。

ヒュンケルも客員（ゲスト）として一応、傭兵ギルドに属している。

たまにエンドールの兵士との合同訓練を見学する事もあるので、エンドールの兵士たちの練度を見ている（客員なので参加はしない…ヒュンケルの強さを直に知らしめると仕官話が持ち上がる可能性が高いから）。

当然、自分やかつて共に旅をしたアリーナと比べるとかなり弱いが、一般的な兵士としては練度が高い。

自分の世界の国でいえば、ロモスやパプニカの兵士よりも練度は高い。

最も、ロモスやパプニカは兵士の練度はそれほどでもない。

最強の騎士団を擁するカール、城塞王国と呼ばれたリンガイア、兵器の質が高いベンガーナなど同じ大陸に複数の国をようするギルドメイン大陸のある国々に比べると兵士の質はかなり落ちる。

まあ、パプニカは賢者を擁する国でもあるので、魔法兵団は強いが…。

それに武器不足と言っても、足りないのは剣であり、戦争の主力兵器はどちらかといえば間合いの広い槍である。

戦争では、槍が使えなくなった後の武器が剣になる。
よほどの剣豪でもない限り、剣を主武装とする兵士は少ないのだ。
そして、ボンモールはエンドールとは逆に防具不足…正直、勝算はかなり低い。
更にヒュンケルが見た限り、ボンモールの兵士の練度はエンドール兵と大差がない。
ならば、兵の数が多いエンドールの方が有利である。
無論、戦争は兵力だけで勝敗が決するわけではないが……ボンモール王としても戦争をするのは今回が初めてらしい。
初めての戦争で世界一の大国に攻め込むのは、いくら何でも現実的ではない。

結局、親書のやり取りでエンドールとボンモールの戦争は回避された。
ボンモール王は次のエンドール王が自分の息子である事に満足し、領土的野心を満たせた様だ。
リック王子とモニカ姫の間にできた子供にそれぞれの国を継がせる事になる様だ。
最も、国力的にボンモールはエンドールの属国扱いになるのだが、どちらの国の王も自分の孫になるので問題ないらしい。
ヒュンケル

「成程。ボンモール王はかなり単純な権力志向の持ち主のようだな」
トルネコ
「まあ、無駄な戦争が回避できたのですから」
トルネコは、武器商人とはいえ死の商人というわけではない。
怪物（モンスター）という驚異がある以上、武器の需要は無くならない。
わざわざ人間同士で戦争しなくても、十分需要があるからだ。
トルネコ
「私としましては、今回の事でエンドールに店を構える事を認めて頂けたので、万々歳ですよ」
トルネコは今回の戦争回避の立役者として功績を認められ、エンドールで店を開く許可を貰えたのだ。
正直、これほど簡単に許可が下りるのは稀である。
何より、エンドールにはすでに武器屋があるのだ。
世界一の大国とはいえ、城下町の規模はベンガーナに比べると小さい。
ベンガーナは二つの世界一の大国と言えよう。
なので、武器屋も一軒あれば十分なのだ。
ヒュンケル

「にも関わらず、新たな武器屋の開店許可が出たのは、トルネコの功績だけではなく、やはりエンドールの深刻な武器不足が原因だろうな」

以前に記したが、エンドールは武器不足なので、正規兵が銅の剣を使っている有様である。

エンドールの武器屋の在庫にはナイフ系や槍系はあるが、剣系が一品も無いのだ。

無論、この店も何とか剣を仕入れたいとは思っている様だが、その為の努力を怠っていたと言わざるを得ない。

この世界で国が武器を仕入れるのは、国内の武器屋に受注するのが基本の様である。

国内で不足しており、ボンモールには橋が壊れて行き来できなかったとはいえ、エンドールは定期船での貿易も行っており、アネイル地方のコナンベリーやスタンシアラ国などから輸入するという手段もあった。

輸入分割高にはなるが、その分くらい余分に払う甲斐性はエンドールにはある。

防具屋の充実した品揃えを見るに、武器屋は仕入れを疎かにしていたのだろう。

主力武器が槍とはいえ、やはり帯剣は戦士や兵士にとっての誇りである。

それが銅の剣では格好がつかないという理由もある。

そこで、新たな武器屋を認める事で、発破をかける目的もあるのだろう。

ブライに呆れられたエンドール王だが、調子に乗りさえしなければ為政者として無能

ではない様だ。

ちなみに現在閉鎖中のカジノには、はやぶさの剣という強力な剣があるが、これはカジノコインで６５，０００コインでゴールドに換算すると６５０，０００Ｇになるので、現実的ではない。

トルネコ
「さて、問題の武器屋の開業資金ですけど……３５，０００Ｇかかります。私貯めた資金は１０，０００Ｇですから、あと２５，０００足りません…工面するのに時間がかかりますね」

ヒュンケル
「…そういえば、前にこの町の富豪の依頼を受けた事がある。その富豪は骨董品マニアで、ボンモールから南にある洞窟に眠っていると言われている【銀の女神像】を欲しがっていたな。まあ、流石に俺を護衛にしても自分で洞窟に取りに行く勇気は持ち合わせて

いないので、独り言の様に呟いていたが、宝探しは傭兵ギルドの仕事ではないからな。
無論、お前が自分で取りに行くというのなら、護衛として付き合うが…」
トルネコ
「無論です。人任せにして夢を果たすつもりはありません。当然、自分で取りに行きますとも」
こうして、トルネコとヒュンケルは女神像の洞窟に向かう事になる。
そこでヒュンケルにとって、重要な出来事が起こるとは、二人とも予想だにしていなかった。